

昭和9年(1934)設立

財務省許可 社団法人 昭和経済会

第59巻3号 20年3月号

昭和25年6月24日 第3種郵便物認可
(毎月1回1日発行)
平成20年2月26日印刷 平成20年3月3日発行
昭和25年10月19日
日本国有鉄道特別扱承認雑誌第1797号

国会図書館永久保存書

昭和経済

Manager Association of Japan

時局論壇 変容する世論

神が戸を閉される時

原油マーケットと、世界経済

山崎 正和

福江 等

佐々木和男



伊豆風景・江之浦港

昭和経済 20-3月号

昭和25年6月24日 第3種郵便物認可 (毎月1回1日発行)
昭和25年10月19日 日本国鉄道特別扱承認雑誌第1797号

Showa Economic Study Association
企業家・経営者団体

財務省 本省許可

社団法人 昭和経済会

事務局 〒104-0028 東京都中央区八重洲2-11-2

TEL 6820-6000・3271-8846 FAX 3271-3104

<http://www.showa-ec.or.jp/>

e-mail showakeizai@crux.ocn.ne.jp

人間社会は今まで幾多の歴史的試練を経て、その存続を得てきました。

その間、私達は経済社会の生活の中で、自然科学への洞察は驚きを以って、文化科学への触発は閃きを以って発展に寄与してきました。科学技術の進歩と開発は人間の英知をもつてこれに臨み、文化科学の啓発と振興は人間の情操をもつて、限りなく高めてゆかねばなりません。

歴史のいかなる発展過程においても、常に人間の尊厳をうたいあげ、自由と平和が約束される豊かな人間社会の存続が、私達の目的であり実践であります。

昭和経済会は、伝統を重んじ、時代の変化に機敏に対処しつつ、この普遍的な理念のもとに、日常の企業経営と経済活動を通して、さらに公私経済の発展と推進に役立つ啓発、協力、親睦の団体として、その使命を果たしてまいります。

社団法人 昭和経済会

社団法人 昭和経済会の案内

創立と趣旨

会員制の企業家、経営者団体で我が国の「公私経済の発展助長と会員相互の連絡並びに親睦を図る」目的で、一九三四年（昭和九年）五月十五日創立され昭和十四年、大蔵省から社団法人の許可を受けました。

主な活動

- ① 会員相互の啓発、親睦、協力
- ② 内外の経済、政治、文化、学術の定期講演会
- ③ 政府、関係省庁への要望と提言
- ④ 専門委員の法律、税務、経営相談
- ⑤ 海外派遣留学生奨学基金の活用
- ⑥ 月刊「昭和経済」の発行

続・増頁発刊



卷頭言 佐々木誠吾 (2)

寸評

(35)

「時局論壇」

変容する世論 山崎 正和 (6)

わが回想記

堀江 忠男

(41)

昭経俳壇

遠藤 蘆穂

(44)

原油マーケットと世界経済の様相
学校経営と、日本の将来は 佐々木和男 (10)

表紙絵のことば

関根 常雄

(48)

神が戸を開される時

福江

等 (20)

後記隨想

佐々木誠吾

(49)

卷頭言 佐々木誠吾

一月二十六日、日曜日正午から、浅草富士小

学校の五年二組当時のクラス会が、地元の浅草仲見世の老舗「ぱいちら」でありました。当日には、担任の長浜テル先生に女子六人、男子四人計十一人が集まりました。毎年のことで、出席人数が少なくなつてゆくように思うのは止むを得ないことでしょう。むつまじく、和式の洋風レストランの二階に席をとりました。この日、私は玉川神の教会の日曜礼拝に出席していましたが、途中から失礼しています。

恩師の長浜先生は八十三歳になりましたが、生涯独身を通しています。終戦後の貧しい生活が続くなかを、教育の現場に携わってきました。当時は、国も家庭も、そして学び舎も、今では考えられないほどの貧しい状況でした。が、不平を云うわけでもなく、不満を述べるでもなく、皆な楽しく勉学に励んでいたのが不思

議なくらいであります。人々の心には、もの不足のなかで味わう、ささやかな満足した生活意識と、未来につなぐ勤労意欲がありました。

私は三十歳で所帯を持ち、独立して故郷の浅草猿若町を離れましたが、地元には、代々商売を引き継いでいる友だちがいて、小学校のクラス会は、こうした人たちが世話役になつて毎年呼びかけてくれるので感謝しています。お互いに再会を喜び合い、昔のことなど、とりとめもなく語り合つてきます。このクラス会では「青空」という小冊子も出して、こうした会の模様や、同輩から送られてきた便りなどを載せて、クラス会のあつたあとに送つてきてくれますが、当日も「各自、何かコメントを」、という要望で、皆に一枚の便箋が渡されましたので、私は醉狂に、左記の和歌を書いて幹事に渡してきました。その時の和歌をそのまま載せた方が、情景と、私の思いが簡単にお分りになるとthoughtて、ここに載せた次第であります。

詠

浅草に生きて勤めを果たす友いて学び舎の人と会へしも

畏敬する長浜先生に相まみへよわひ人十三
に若きおもざし

浅草の「ぱいち」の店に師をまねき睦き席にて語りあへしは

浅草に内山、石井、平林、甲斐ある友らおり
しまほらま

あさくさのふるさとに立ち思ひぐることさ
まざまにありてゆかしき

ふるさとの猿若まちの隅に建つ江戸の芝居の小屋のあと碑

待乳やま聖天さまの丘にたちかすむ隅田の川をながむる

せみ、トンボ、蝶を追ひゆくはらからと幼きころのふるさとの日々

仲見世をゆく先にみる観音堂うやうやしくもそびへたつなり

仲見世をすぎて宝藏門をくぐりゆきみやちにたかき五重の塔かな
きさかたの色まちをすぎ黒べいに沿へば昔の女のうかびく
ててははも余もはらからも遊びすぐ観音堂の広きみやちに
正月の空に群れとぶ鳩よりもあかねに高き五重のとふかな
先生が思ひをこめてしとやかに「別れの朝」をつやめき歌ふ
あさくさの雷おこしと人形焼ふくろにつめて孫に買ふて來
言間の橋をわたればとろとろと燃へておちゆくふるさとの陽よ
この先の友の弥栄を祈りつつ木槍のうたに締めて別れぬ
おみやげに塩野の和菓子いただきて浅草の灯の胸に燃へしむ

(FF金利、〇・七五%の引下げ)

米国でサブプライム問題が発生した昨年八月、私はすぐさま事態の緊迫性を感じて発信し、これをきっかけとして世界的な金融不安が拡大し、世界不況の到来の兆しがあると即座に論評し、各位に警告を発しました。

昭和経済、九月一日発行の巻頭言に於いても警戒の手をゆるめないと注意を促し、そして次の和歌を詠んで会員各位に印象づけたつもりです。

問題のにわかに浮ぶサブプライム・ローンは起す金融の危機
米国発金融市场に荒波の立ち恐慌のうわさ走りぬ

グローバル化の経済下で、昨年八月の当日、世界の株式市場はニューヨーク発株式暴落に始まり、繰り返す荒い乱高下に見舞われ、その後の株式市場の低迷は、経済悪化の連鎖反応を暗示するもの

되었습니다。ちなみに今日のニューヨーク・ダウは高値から二、〇〇〇ドル強の下げ幅を演じて十五パーセントの下落率となっています。世界から外されて凋落一途の東京株式も論外ではなく、今までのだらしない動きの上に、なんと六、〇〇〇円近くも暴落して追随しております。下落率三〇パーセントというものです。改革を怠り、無為無策の日本は、この点についても悪名高く世界一でしょう。

世界は今、ニューヨーク発の世界同時・株価暴落の連鎖反応に見舞われております。これが今後の実体経済に及ぼす影響は無視できず、大きな懸念材料であります。各国当局は、それなりの対策を以つて協調し、金融市场の混乱と、世界経済の後退を防ぐ姿勢を取つてきておりますが、もとより楽観は許されず、只今現在、一〇〇パーセント確信を以つてこれを防ぐ政策は見当たりません。目下のところ試行錯誤を試みて、その効果の反応を見るしかありませんが、過剰な不安人気を增幅

せしめるることは絶対にこれを回避しなければなりません。

昨日（二十二日）、米連邦準備理事会は緊急理事会を開き、FF金利を〇・七五ペーセント引下げました。先手を打つたとは云え、事態の深刻さをまざまざと見せつけるものであります。

① 米経済の見通しが悪化し、景気の下振れのリスクが高まつた。

② 金融市场の悪化。

③ 住宅市場の長期低迷と、雇用の悪化。

などが主な理由で、これが経済全体に及ぼす懸念が大であることを指摘しています。状況次第では、新たな追加措置を講ずると云つておりますが、既に問題発生以来、日、米、欧の株価の急落は著しく、将来の見通しは、予断は許されません。米国経済の後退は、直ちに全世界に波及することは勿論のことであります。新興国の経済発展の力がこれをカバーすると云う楽観論も、以前からかなりあります、現実的な見解とは程遠いものであ

り、事態はもつと深刻であります。

巨大なアメリカ経済の動向次第では、元気の良い中国、インドなどひとたまりもなく、その巨大な波に直ちに呑みこまれてしまうことは必定です。今後とも大きな注意が必要です。米連邦準備理事会の緊急且つ大幅な利下げ決定は、遅きに逸した感もいがめませんが、これを効果ならしめるには更なる追加措置が求められます。アメリカが景気後退に入つて、それが引き金となつて、世界が不況へ突入しようとしているのに対し、水際で懸命に阻止しようとしているFRBの姿が浮んで参ります。

米政府による大型の景気対策も必要となるでしょう。世界の各国が足並みをそろえて、これに協調、追随して、有効な景気刺激措置を迅速にとることによって、行き過ぎた不安心理を払拭し、世界的株式の連鎖的暴落を防ぐ必要があります。

（一月二十二日 記）

〔時局論壇〕

扇動者なき暴走

変容する世論

中央教育審議会 会長
山崎 正和



読売新聞（十月八日朝刊）に、「頭のない化け物」という面白い記事が載っていた。中国からの報道で、北京の故宮にアメリカ資本のコーヒー店があつたものが、世論の攻撃を受けて撤退したという話である。中華文明の聖地に、アメリカ消費文明の象徴があるのは冒瀧だとする騒動だから、それだけなら聞き飽きた民族主義病の再燃にすぎない。

目新しいのは、これが一人の若いテレビキャスターのブログへの書き込みに始まり、本人も驚くほどの反応の増幅によって騒ぎになつたという点である。提唱者自身の本意は常識的なもので、中国も日本の京都のように自国文化の多様性を守るべきだ、という提唱にすぎなかつた。それがたちまちブログの応酬のなかでかつてに過熱して、中華文明と米国資本の対立にまで誇張され、「アメリカは出て行け」という怪

氣炎が爆発したのだという。印象的なのは、騒動のあとで取材を受けたこの青年が、言葉では喜びながらも表情は沈んでいたという報道である。彼は英雄に祭りあげられる一方、狹隘な民族主義者だという非難も浴びた。だがおそらく彼は、みずからも報道関係者の一員として、何よりも制御のきかない世論の独走にとまどつていたのにちがいない。

読売新聞の記事では、この問題は中国の排外的な民族主義の病弊の例として捉えられていた。たしかにその通りであって、言論統制下の独裁国では世論の暴発はただ一つ、愛國主義の名のもとにのみ許されるのだろう。

だがこの報道を読んでそれ以上に私の関心を惹いたのは、むしろ独裁国でさえ現代では世論の暴走というものがあり、しかもそれが「頭のない化け物」として起こりうるという事実であった。中央政府の指導もなく、問題提起者の本意にも反して、いわばリーダーなきボピュリ

ネット、TV：揺れる個人

ズムが独走したことであった。というのはほかならぬわが日本において、最近の二つの国政選挙をめぐつて私は同じ化け物を見ていたからである。いうまでもなく一つは小泉政権下の衆議院選挙であり、もう一つは直近の参議院選挙の怪事である。どちらも雪崩のよくな激変をもたらしたが、結果的に勝負はいわゆる「単一争点」で闘われた。一方はもちろん郵政民営化、他方は社会保険庁の不祥事である。後者には閣僚の不正や失言という要素もあつたが、圧倒的に投票者を動かしたのは、長年に及ぶ年金記録の杜撰な管理の発覚だったといわれる。

さらにその争点が国民に提示されたのは、いずれも選挙の直前であった。郵政民営化の場合には、論議は長く闘わされていたものの、法案が参議院で否決されたあと、小泉首相が衆議院を

解散したのは電撃的であった。今回の年金不祥事も、それが発覚して見る間に政治の問題と化したのは選挙の直前であった。そしてその結果として、どちらの選挙でももつと長期的な政策、より本質的な政治選択の論争は消し飛んでしまった。前回の総選挙で民主党の岡田代表は公約を羅列し、重要なのは郵政だけではないと叫んだが、国民は聞く耳を持たなかつた。今回も安倍首相の言う重要政策、教育や安全保障や憲法改正などの提唱は、むなしく虚空に消えたようである。断片的で、瞬間的に投げられた問題に国民が燃え上り、これほど大挙して与野党間に揺れるというのは、異例である。通常こうした世論の激変は「ポピュリズム」と呼びたいところだが、不思議なことにそれにふさわしい指導者というものがどちらにもいない。

ポピュリズムといえば、つねに雄弁な扇動者がいるのが従来の通例であつてF・D・ルーズベルト大統領の政敵ヒューリー・ロングなど

を養う条件は、今世紀になつてますます増えているからである。第一はイデオロギーの終焉であつて、人類の心に潜む不平や怒りは変わらないのに、それを持続的に方向づける軌道がなくなつたことだろう。中国のイデオロギーは統制力を弱めているし、日本の旧マルクス主義政党はつとにマルクスの名を口にしなくなつた。さらにかねていぢるしいのは都市化の影響であつて、国民が地縁や血縁はもちろん、職場や近隣の共通感情からも自由になつたことが大きい。個人が組織と一緒にになって共感したり、顔の見える他人と同じ思いを確かめあう機会が減つた。個人の感情は根なし草になつて、その分だけ簡単に大きく揺れるようになり、同時にメディアの伝える世論の大勢に乗りやすくなつたことが考えられる。

だがやはり決定的なのは現代の電波メディアの情報、テレビやパソコンや携帯電話にもたらす情報だろう。新しい情報は活字情報に比べ

が広く知られている。だが小泉首相は先の選挙前に辞任を予告していたし、今回的小沢民主党代表は安倍首相に比べても、およそ雄弁とも人氣者ともいえそうにない。こうした選挙が今後も繰り返されるかは不明だが、どう見てもこの二つの政治的雪崩は「頭のない化け物」が動かしたとしか思われない。中国で問題の本質が世論によつてねじ曲げられたように、日本でもテレビや週刊誌の一部で噂が誇張された。じつさに消えたのは年金記録であるのに、年金そのものが消えたと聞かされた国民は多いはずである。もちろん人類には古くから流行という現象があつて、誰言うともなく社会に変動が起こり、大多数がたちまちそれに服従するという事態は珍しくなかつた。噂話も流行歌もファンションも、「頭のない化け物」のしわざであつた。だがそれが社会問題に及び、政治をも左右するというのは、ひょっとすると現代の新しい現象かもしれない。考えればこの新しい化け物

で刺激が強く、しかも断片的で瞬間的な訴求力に富んでいる。裏返せば、それらはたえず先行する情報を陳腐化し、長期的な問題について人間を忘れやすくするのである。これに関連して気になるのは、昨今の模倣犯罪の頻発である。凶器や手口の種類から、犯罪者と被害者の人間関係の種類に至るまで、事件が報じられるどたまち酷似した犯行が起ころ。幸いこの種の報道もまた陳腐化しやすいから、国内の通常犯罪の場合、事件の連鎖はほぼ数件で終わることが多い。だがもしイスラム過激派が同じ感情状況にあるとしたら、という想像は怖い。彼らも移民と都市化によつて根なし草となり、イデオロギーは反共、反米、宗派対立のあいだを不安定に揺れ、ビンラーディンの影を遠くに見て「頭のない化け物」と化した可能性が高いからである。

(中央教育審議会会長)

原油マーケットと、世界経済の様相

学校経営と、日本の将来は

学校法人静岡理工科大学理事長
元・三菱商事㈱ 本部長
サウディ石油化学㈱ 前・社長

佐々木 和男



さて、これからはサウディについてお話をしたいと思います。

お手元にお配りしたサウード家系図をご参考下さい。これは私の個人的な資料として、必要に応じて中身を改訂しているものです。

サウディで大きな仕事をしようとするなら、その権力構造をしっかりと認識している必要があるのですが、特にサウディ王家を知る必要があります。この資料はそのエッセンスとなるものです。

ご説明いたします。初代国王アブドゥラジーズは一九〇二年より一九五三年まで在位し、その間に十八人の妻と結婚し、三十六人の王子を含む五十八人の子を得ました。サウディでは、一人の奥さんが平均六一七人の子供を生むので、五十八人の子宝に恵まれたのも領けますが、威風堂々とした、精力絶倫の国王であつたといわれています。資料には、三十六人の王子（プリンス）の生まれた年と現況を列挙いたしました。

た。今日までに、サウード、ファイサル、ハリード、ファハド、アブシドラーと六代の国王が就任しておりますが、いずれもアブドゥラジーズ初代国王の息子が継承しております。現国王のアブツドラーは、既に八十四才になろうとしていますから、問題は次の国王は誰になるのかということです。初代国王の十八人の妻のうちスディイリ家の妻が産んだ息子が、中でも際立つて聰明であると云われており、第五代国王ファハド、今の皇太子スルタン、更にはアブドラマン、トウルキ、ナイーフ、サルマン、アマハドの七人は“スディイリ・セブン”と称されてサウディ人の評判が極めて高い存在です。

問題はいずれも、高齢者であるということです。次の国王は、現皇太子スルタンとなるでしょうが、年齢は八十歳です。現国王が長生きしそうですから、スルタンが王位継承できるか甚だ疑問です。スディイリ・セブンの中で最も人望の高いのが、現在リヤド州知事を務めるサルマン殿

下です。彼でさえ、早くも七十一歳ですが、ひょつとすると次期国王の最有力候補といえそうです。私も彼に拝謁したことがあります。風貌も物腰も誠に立派で崇拜できる人物でした。

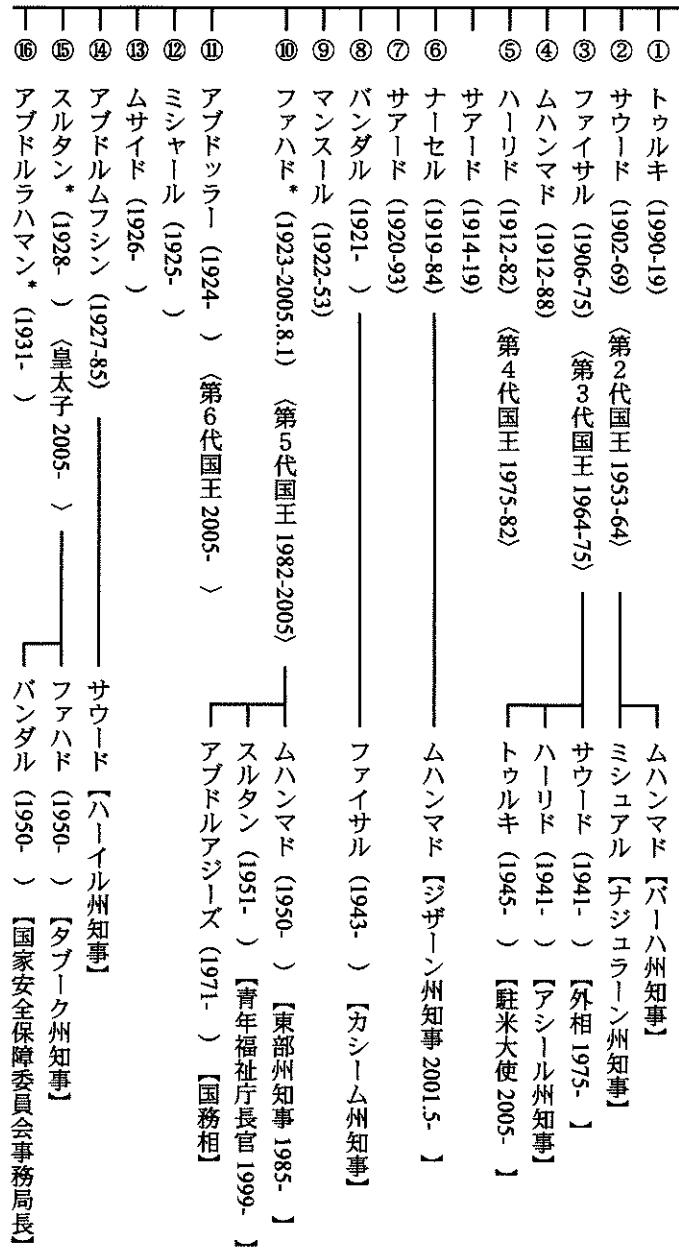
ところで、初代国王アブドゥラジーズには十二人の王女がいるのです。イスラム教義が最も厳格に守られているサウディでは表の世界には女性は出ることはありませんので、彼女たちの動静は全く判りません。

ところでサウディにあって政治・経済・外交の中核を握っているのが、このスディイリ・セブンなのです。特に石油・鉱物資源を牛耳っているのは、トウルキの息子ファイサル（石油鉱物資源省顧問）とサルマンの息子アブドルジーズ（石油鉱物資源省次官）なのです。石油鉱物資源省大臣はナイーミですが、本当の実権を持っているのは、プリンスであるこの二人であり、民間出身のナイーミ大臣は、この二人には逆ら

サウード家系図 現在のサウード家（抜粋）

括弧（ ）内は生年と没年。括弧〔 〕内は王位についていた期間。括弧【 】内は現職名。

アナルド・ル・アージーズ（初代国王 1902-53）（1880-1953）



〔注〕 初代アブドルアジーズ王は18人の妻（便室を含む）を持ち、男子37人、女子22人を得た。
 *田：「アハヘド一族」（以前はスティリヤセハーンと呼ばれていた）

(1) ダニエル (1931-) [石油鉱物資源省顧問]
 (2) タラール (1931-) (自由プリンスのリーダーであった) — ハリーム (1955-) [Kingdom Holding Co.]
 (3) ミンヤコー (1930-2000)
 (4) バニハ (1932-) 【国民警備隊副長官】 (自由アコンソスの一人であつた)
 (5) トゥルキ* (1932-) ファイサル 【石油鉱物資源省顧問】
 (6) ナッワーフ (1933-) ムハンマド【駐イタリア大使】
 (7) ナーフ* (1933-) [内務相 1975-]
 (8) ファシワード (1934-)
 (9) サルマハ* (1936-) 【ロイヤード州知事】 ————— アブドルアジーズ【石油鉱物資源省次官】
 (10) マーハム (1938-2003) ————— アブドルアジーズ【マダイーナ州知事 2003.10-]
 (11) サーヒル (1939-58)
 (12) ムドウード (1940-) 【戦略研究所長】
 (13) アブドルヤシルト (1941-) 【アラウフ州知事】
 (14) サッタム (1941-) 【ツヤード州副知事 1968-】
 (15) アハマド* (1941-) [内務副大臣 1978-]
 (16) ハズルール (1941-) [実業家]
 (17) アブドルマジード (1942-) 【マッカ州知事】
 (18) マシュフール (1942-)
 (19) ムクターン (1945-) 【前】トマーナ州知事 1985-2005]
 (20) ハマーク (1947-1994)

えないのです。

私は、サウディ石油化学に出向してからは、こうしたサウディの権力基盤を勉強し、どのボタンを押すべきかに神経を使いました。ファイスル石油鉱物資源省顧問のところに何度も足を運びました。時にはアポを反故されたり、何時間も待たされたりしても文句を云わずに面談の機会をしつかりと待ちました。そして、結果としてしつかりとアラコムから原料ガスのエタンを長期に亘り供給を確保できました。

日本の政治外交は、この辺の力関係を無視し、経済省の大臣、資源エネルギー庁長官などは、ナイーミ大臣と会談することに拘泥しました。表と裏の関係が仮にわかつたとしてもそれを覆せないので。そこで、私あたりに問い合わせたりして、裏情報を取りながら仕事をしているのです。誠に無駄の多い話です。

現在、サウディにはプリンスの数は一八、〇〇〇人位いるはずです。それだけいると同じブ

リンスといつてもピン・キリです。国家収入の八十五%が原油輸出からの収入となりますと、このお金のなる樹を、王家が離す筈がありません。今でも國家収入の二〇%程は王家に渡っていると思われます。王家につながる人間の面倒中でもU A E のドバイやアブダビあたりが脚光を浴びています。確かに近代ビルが林立し、活況を呈しています。しかし、こういう国々の近代化の基礎のインフラはまだまだ整備されていないのが実情です。

ドバイは、原油・天然ガスの産出は少ないので、産業誘致に極めて積極的です。カタールは原油産出は小さいのですが、L N G は結構出でますので、外貨が潤っています。最近は中国・インドあたりはこういう国々とのコンタクトを密接にしており、エネルギー保全政策を重視する日本にとつては課題を残しております。私は、十月末に中国に参りました。これは静岡県

と姉妹関係にある浙江省との教育交流ミッショングの一員として行つた訳ですが、各都市を廻つてみて感じたことですが、中国は明らかにバルの真っ只中にあるといふことです。アテンンドする現地の政府役人・ガイドのすべての人が株取引や不動産投資に手を染めていることです。その結果、日々の相場の上げ下げに公務中といえども一喜一憂しているのです。聽けば、銀行は一般人の年収の三倍位までは、ほぼ無担保で資金貸し出しに応じることです。中国人たちは、株は上がるものだと、だから株を買わないのは損だと決め付けているように思えます。何となくどこかの国が辿った道だなあと感じております。体制の異なる国のことですから、同じである筈がありませんが心配な姿です。

ところで、中国も確実に高齢化が進んでいます。勿論、日本のそれとは比較になりませんが、一人っ子政策の影響が早くも出てきました。若

年者の労働力がぐんと減つてきていますから、早晚日本と同じ高齢化社会に入つていく、所謂コスト・アップの国に成りつつあります。北京オリンピックまでは、このまま行くでしようがその後どうなるか。中国政府は当然この辺のことは十分承知の上で政策決定してきているでしょうが、早くも日本の大企業は、中国を生産基地とは看做さないで脱却を始め、今はベトナムやもっと南の方に、生産拠点を移しつります。中国社会は依然として、中央と地方の格差は極めて大きくアンバランスですが、中国の政治体制はこれを浮き彫りにしないで、今後は地方を何とか取り込む方向で進んで行くものと感じます。

ここからは、教育・学校問題についてお話をさせていただきます。私は、縁あって昨年一月より、学校法人・静岡理工科大学の理事長の任にあります。静岡理工科大学を頂点として、その下部に二つの高等学校と四つの専門学校か

ら成り立つ学園グループであります。来年（平成二〇年）四月には更に二つの専門学校が開校する運びとなつております。お手元にパンフレットをお配りしておりますのでご参照いただきます。「承知のように、今や学校経営というの非常に難しくなつてきております。十八歳人口が著しく減少してきております。又、高校生の理数離れは相変わらずです。昔は、倍率何倍とかいって大学側は入学者数を絞つておりましたが、今は学生の方が大学を選定してきており、定員割れの大学が多くなつてしまいまして。静岡理工科大学は、こうした中で、その名の通り、理工系の学生だけが対象の大学です。しかも、平成三年に創立した、新興の若い大学で、その設立趣旨は、地域に根ざした技術者を養成することとなつております。同じ私立大学でも、歴史もある有名私立大学であれば、学生はそのブランド力に魅力を感じて沢山応募しきますが、私たちの大学はそういうわけには

結局、私に理事長の職に就いて欲しいということになつた経緯があります。今年(平成十九年)の入学生は定員の七〇ペーセントでした。来年の(平成二〇年)は何とか九〇ペーセント以上を確保しようと頑張っているのですが、何とかいきそうとの感触を掴んでおります。

参りません。しかも、先ほど申し上げましたように、最近の学生は楽しく卒業しようと、いうものが多めで、ましてや理工系専門となるとどうしても敬遠されがちです。しかし、こうした現象は日本にとり、誠に危険なことです。日本のこれからはどんな分野でも技術が備わってなければ成り立たないので、世の中、お金が余りあるほど若い人は物作りの世界に入つてこないのです。出来るだけ、樂をして儲け、過ごしたいという人が多くなつてきています。しかし、これから日本の未来を考えると、こうした傾向は由々しき限りといえます。そこで、私自身は法律を学んだ文科系の出身ではあるものの、学校経営者として、特に理工系に特化した大学の經營者として、理工系に特化した大学の運営が怪しくなり、昨年・今年と学則定員が割れてしましました。そこで、何とかしなくてはと、

では、大学への進学高校として一応の評価を得ています。一般には、国公立大学や有名私立大學にどのくらい受かったかが、進学高校としてのバリューにつながります。従つて高校の教師は成績の優秀なものには有名大学に何とかはついて欲しいと指導するわけです。ところが経営者として、こうした高校を同じグループに持つていて、静岡理工科大学に優秀な成績の学生を出来るだけ送り込んで欲しいわけで、高校側に何とか対応をするようと暗にプレッシャーを掛けるわけです。ある意味では一律相反する話になりますが、このへんのところも抑

えないと学校経営は成り立たないのです。一方、専門学校は現時点で四つあるわけです。一般に専門学校は二一三年制で、卒業するまでに各種専門の資格を取り、企業に就職して行くのが通常の姿です。四つの専門学校のうち、三つは情報系の学校です。一時期はＩＴブームもあり、情報系の専門学校卒業生はどこからも引張りだこでしたが、最近のＩＴ離れは直ちに新入生募集にも影響が出てきました。一方、大学全入時代到来と高校生の就職率が良くなつたということで、専門学校は狭間に入つて生徒募集に苦慮するようになりました。今年と同様に来年も募集定員割れが予想されます。ただ、高校、大学と異なり、専門学校は経営の視点からみると、機動性があります。比較的設備基準が穏やかであると同時に統廃合もしやすいという利点があります。今後の方向性をしつかりと見極めて、再来年あたりは大きく軌道修正を図りたいと考えています。

さて、大学では、教授会という組織があります。昔から教育と研究は共に独立・自由の気風がありました。取り分け、国立大学の教授会はこれを金科玉条として、教学側のすべての人事権を持つており、経営側の介入を認めできませんでした。近来、民間手法による経営手法を、学問を司る大学にも適用しなくては、大学そのものの存立さえあやぶまれるといった論議が活発になりました。私どもの大学は、設立当初から国立の手法を導入しました。関係から、教授会の権限は誠に閉鎖的・独善的であります。これまで、歴代の理事長は教授会に物申すといつては、弾き返されました。私は、理事長就任以来この問題につき、先ず学長と十分な意見交換を交わし、コンセンサスを作り上げるのに時間を費しました。幸いに学長は極めて理解も早く、協力的でしたので、教授会に対する説明・説得をお任せし、九月には人事権を大学協議会に移し、そのメンバーに経営側代表

を複数送り込み、十分な意志の疎通を図った上で、理事長に諮問するシステムとしました。最終判断は理事長権限とすることになったわけです。具体的には教員の採用人事に関する事案は、教授会の株組織に合った教員選考委員会に託されました。そして教授会は、教育研究に関する事案を司る機関とし、人事に関する事項については大学協議会により報告を受けることとなりました。爾来、教授の皆さんと色々な観点から意見交換する機会も増え、私も自由に講義中の教室出入りできるようになり、誠にオープンな雰囲気のキャンパスになつたと自負しております。

理事長の職責はあくまでもしっかりとした経営に心がけなくてはなりません。学校は準公益法人とも考えられますから、企業経営のように収益を上げるためにリスクを承知の施策を講じることには甚だ不向きです。学校は寄付行

為により、設立され、運営される訳で、主たる収入は、学生の納付金と国の助成金、企業からの研究負担金等となります。学生を預かり、教育し、立派に世の中に送り込まなくてはなりません。ただ、経営者としては、或る制限を設けて資産運用による、収益の役割となります。

私どもの大学では、特色ある教育として、先ず“物から入る教育”を標榜しています。物に触れ、その理屈・役割・出来栄えを検証してから、“座学に入る”。学生の物を直視する興味を先ず持たせてから、教室で理論的考察させようとのことです。理工系に興味を持つて貢う手法ともいえます。

お蔭で、文部科学省からも注目され、最近では補助金も余計にいただけそうな雰囲気です。また、建学の精神“地域貢献”を第一と考えて、市民体験講座、産学交流会、各種連携フオーラムなどを活発に行っています。大学卒業生の就職率一〇〇%を誇っています。ご承知

質疑応答に続く

のように、これからの中学校教育にあって一番難しいのは如何にして、夢あるところに学生を誘導する、或いは学生と一緒にになって将来の姿にベクトルを合わせていくことであろうかと考えます。こうした観点から考えますと何とか良い方向に走っていると思いますので、これからも学生の為という視点に立つて、教授の皆様と話し合って行こうと考えております。

以上、雜駁ではありますが、教育・学校という点の話とさせていただきます。

(完)

司会 岩金 滋代

使徒の働き 十六章六十一節
第一コリント 十章十三節

本日は、「神が戸を閉されるとき」と題して、
福江等先生に みことばを取り次いで頂き

神が戸を
閉されるとき

前・ナザレン神学大学学長

井深記念塾ヨーアイ

牧師

福江 等



ご紹介にあずかりました福江等と申します。嶋田先生の牧会されている、このとても美しい礼拝堂、玉川神の教会で皆さまとともに、主を讃美し礼拝できることを、とても嬉しく感謝しております。私の記憶も余り定かではないのですが、私が丁度、その大学から去る時に先生が入つてこられたような、そういう入れ違いの時だったようであります。今再びこうしてお会い出来るのは、何かとても不思議な感じがいたしております。

ます。

私は、二〇〇一年から今年の六月まで約六年間、フィリピンのマニラにあります神学校でご奉仕させて頂きました。最初マニラで生活を始めた時に、数ヶ月と云うものは道を覚えるのに大変苦労をいたしました。車で外に出るたびに、必ず道に迷ってしまうと云う繰り返しをしていましたけれども、ある時、私たちはマニラ市内の中心部に出掛けておりました。そして例によつて道に迷つてしまつたのであります。

何度となく、途中のガソリンスタンドに寄つては「オルテガス・アベニューはどう行くのですか」と尋ねました。「オルテガス・アベニュー」とは私たちの神学校がある道であります。町中は、ジブニーという乗り合いバスのようなものと、トライスクルというオートバイが目まぐるしく走つており、大変な人の混雑であります。右（カナン）だ、左（カリワ）だ、真っ直ぐ（デレチョー）だ、と片言のタガログ語で右

往左往しながら、迷いこんだ道からなかなか抜け出せずにおりました。日も暮れて不安とあせりが募るばかりです。懸命に訊ねたづねして、二十番目ぐらいのガソリン・スタンドで、訊ねましたところ「この道ですよ」と教えてくれましたが、自分のいたところが実はオルテガスアベニューだったわけで、その時は肩の重荷が下りるような気持になつて、不安と焦りからやつと解放されて家路に着くことが出来ました。考えてみると、人生は、一体どの道を行つたらいいのかと云う、選択の連続なのかも知れないなあと思います。そして時にはその人生のある時点で、とても重大な決断に否応なしでも迫られる時があると思います。そして時にはその人生的な決断によって、後の人生に大きな影響を及ぼすことがあります。謂わば、デレチョーを選ぶか、カナンを選ぶか、カリワを選ぶかによって、私たちの人生に計り知れない影響が生じると思います。

今日与えられています聖書の、みことばを通して、私たちの人生と云う道で、時として迫られる選択について、聖書の云う真理を皆さまとともに考えてみたいと思います。

使徒の働きの十六章にあります「こく短かい箇所であります、とても大切な示唆を与えてくれていると思います。使徒パウロ先生と、その同行の人たちが伝道旅行をしているところの記事であります。場所は現在のトルコ、いわゆる小アジアと云われる地方であります。これは彼らにとっては、第二回目の伝道旅行の時に設立したいくつかの教会を再び巡回して、その信仰を励ましたいと願つて訪問していましたようあります。

彼らはすでに馴染みのある町々や、地方だけを巡回しようとしていたのではなく、今回はで起きだけ新しい町や、又新たな地方にも伝道の手を伸ばしたいと願つておりました。小アジアの更に奥深い地方へと、伝道の門を切り拓きました

いと願つていたようであります。
ところが、この聖書のところを注意深く読みますと、十六章の六節のところに、こう記されています。「それから彼らは、アジアで御言葉を語ることを聖靈によつて禁じられたので…」と記されております。これは少し不思議な気がしないでしょうか。イエス・キリストの伝道者が、キリストの福音を新しい土地で宣教しようとしているにもかかわらず、聖靈がそれを禁じると云うこと、あるのでしょうか。神さまはどのような状況でも、どのような環境でも、私たちがキリストの福音を広く、多くの人に宣べ伝えることを励まし、力づけて下さつてゐるのではないかと思つております。しかしそれを禁じるというのは、神さまのご性質からして神の意に反することではないでしょうか。少し、その理解に苦しむところであります。
しかしこの箇所をもう少し読み進めていきますと、再び同じようなことが記されています。

パウロ先生の一行が予定を変更して、小アジアの北西にあるビテニア地方に伝道の手を伸ばそうとして行こうとすると、十六章の七節に、「イエスの御靈みたまがそれをお許しにならなかつた」と書いてあります。これも又不思議なことでないでしょうか。何故、キリストの御靈がそれをお許しにならぬのでしょうか。イエスさまは、あのマルコの福音書の最後のところで弟子たちに、「全世界へ出て行つて全ての造られたものに対して、福音を宜べ伝えなさい」とお命じになりました。それなのに何故、イエスさまの御靈が伝道することを許されないのでしょうか。理解がむつかしいところであります。

しかし、この聖書の箇所を読み進めてゆきますと、驚くべきことが記されております。彼らが行きたいと願つていた地方に、どうしても行くことができなかつたパウロ先生一行は、小アジアの西の海岸にあります港町のトロアスといふところに下りてゆき、そこに滞在している

間に、パウロ先生はある夜、一つの夢を見ます。それは、ひとりのマケドニア地方の人が立つて、「マケドニアに渡つてきて私たちを助けて下さい」と懇願している夢であつたと云うのです。マケドニアとは、海を渡つたギリシャの町であります。パウロ先生は、この不思議な夢を何度も何度も思い出しては考へてゐるうちに、これはきっと神の声に違ひないと確信するようになります。トロアスの港町からあのエーゲ海を渡つて、福音を宣べ伝えるためにギリシャに向つたのであります。

ある聖書学者は、「この時の」とを」のよう表現しています。「人類の歴史の中に於いて、本当の意味で転換点と云うのは、それほど多くはない。しかしその中でも、このマケドニア人の夢は、最も重要な転換点の一つであることは間違いない。なぜなら、この時パウロが、この声に従つたが故に、キリストの福音が西に広がることになり、ついにはヨーロッパと西洋の世

界が福音化されるきっかけとなつたからである」。このように云つております。確かにこのことは、世界の歴史の転換点となりました。しかし、その時のパウロ先生にとつては、まさかこの時点での彼のこの決断が、世界の歴史を大きく変えようとは想像だにしていなかつたろうと思ひます。

今日の、この聖書のみことばを見ますと、神さまというお方は、私たちの人生の戸を開けるのみならず、時には戸を開きられるお方でもあると云うことが判ります。イエスさまは「たたきなさい、そうすれば開かれます」と云われました。それと同時に、イエスさまは時には私たちの人生に於いて、戸を開かれるときもあると云うこと示されています。もつと具体的に申しますと、私たちは人生に於いて、今までと同じように前進してゆくことができない状況といふものに、いやがおうにも遭遇することがあります。今までと同じ方向に、同じように進んで

いくことを、外的状況や、環境が許してくれないという時があります。外からの状況の圧力によって、自分の考えている人生の方向を変えざるを得ないと云う時があります。

神さまは、戸を開かれるばかりでなく、戸を開される時もあります。それは私たちにとつては少なからず試練となります。そのような試練に、時として私どもは遭遇するのではないでしょか。そして、それが時には耐えがたいものとなることもあります。今日の、みことばが示してくれる一つのことは、そのことであります。しかしそれだけではありません。パウロ先生は、小アジアでの伝道が自分の使命だと考えていました。彼は、自分の全ての情熱を小アジアの伝道に注ぎこんでいました。でも何ヶ月も神さまのみこころを求めているうちに、神さまのお考えが、自分の考えていることと大きくなつていると云うことにやがて気が付くのです。彼は自分の考えを、根底から変え

なければなりませんでした。自分の常識をくつがえすことを学ばねばなりませんでした。海を渡つてギリシャに行くと云う伝道のために、全く新しい地域に足を踏み入れることを、神さまが求めておられるのだということを、彼はついに悟る時が来るのであります。

ここに私たちは、大切な真理を見出します。それは神が戸を開されるとき、神さまは私たちに対して特別なご計画を持つていらつしやると云うことです。神さまが、あなたの人生に対して戸を開さるとき、実はそれが、神さまが貴方の将来に対する特別なご計画を持つておられるときであります。あなたに対して全く新しい伝道の道へと導かれるとき、あるいは、あなたに全く新しいチャレンジをさせたいとき、或いはあなたを一段と成長させたいと神さまが願われるとき、そんな時、神さまはあなたの人生の戸を開される時があると思われます。人生の戸が閉されるとき、それは私たちにとつて

は試練となります。痛みがともないます。少なからず悩みます。トラウマとなるかも知れません。しかし聖書では、主なる神さまは、私たちの羊飼いであると云われております。羊飼いが、その羊の群れを危険な方向に行くのを避けて、新鮮な青草と、きれいな水のある場所へと導びくごとに、イエスの御靈、聖靈が、パウロ先生の一言を羊飼いのように導いていらつしやるのが判るではありませんか。

「主はわが羊飼い、私には乏しいことがあります」。主は私たちをみどりの牧場に伏させ、いこいの水のほとりにともなわれます。神さまというお方は、ご自分で何をしていらつしやるか、「ご存知のお方であります。聖書のみことばを通して、神さまは私たちに次ぎのような約束をして下さっています。「私は、あなたの方のために立てて、いる計画を良く知つて、いる。それは災いではなく、平安を与える計画であり、あなた方に将来と希望を与えるためのものだ」。

「これこそが、神さまが私たちに対し抱いておられる」計画であります。ですから、神さまが私たちの人生の戸を閉ざされるとき、それは試練となります。神さまは眞実のお方ですから、私たちが耐えることができないような試練に、会わせるようなことはなさいません。いや、むしろ耐えることができるよう、試練とともに、脱出の道も備えていて下さいます。ですから、私たちが試練に遭遇するときこそ、実は神さまは私たちに対して特別な「計画」を持っていらっしゃるということ、そのことが判るのであります。

その「計画」とは、私たちに対して、将来と希望を与えるものであります。そうであれば、私たちはさまざまな試練に遭遇するとき、愛とあわれみに満ち給う主なる神を信じて、信仰と希望を抱き続けると云うことが、どんなに重要な意味を持つことでしょう。

実は聖書のなかには、その初めから終りまで、

終りだと思われるような経験だったと思われます。何十年もの長い間、モーゼは寂しい生活を余儀なくされるのであります。

しかし神さまは、モーゼに対して、実は特別な「計画」を持っていらっしゃいました。そして神さまの時が満ちたときに、神さまはエジプトの圧政の中で苦しんでいたヘブル人を助け出すために、モーゼを呼び出します。モーゼが何十年もミデアンの荒野の寂しい生活をしていたのは、実は、神さまがモーゼをイスラエル人を救い出し、約束の地カナンに導いていくための、必要な強さを養うために訓練をしておられたのでありました。その時のモーゼには、そのような神の壮大な「計画」を知る由もありません。

モーゼの人生のなかで戸が閉されたのは、背後には神さまのこののような特別な「計画」があつたということが判ります。イスラエルの民の全てを救いだし、彼らに将来を与え、希望を与えておられるのであります。

モーゼの「計画」であります。それこそは、モーゼが苦しい時に胸に抱いていた願いであります。あるいは又、聖書の「ザー」と最後のところへ進んでゆきますと、そこでも私たちは神さまのこのような真理を知ることができます。

聖書の最後にある黙示録の著者は、使徒ヨハネと云われております。そのヨハネは小アジアの沖合にあるペトモスと云う小さな島に島流しにされておりました。彼はイエス・キリストを信じる、その熱い信仰のゆえに迫害を受け、この島に幽閉されておりました。彼は自由を奪われ、生活を奪われ、仕事を奪われ、家族や親しい人々との交わりを奪われ、慣れ親しんだ土地を追われて、この孤島に閉じ込められたのであります。彼の人生の、全ての戸が閉されたような経験であります。どんなに深い孤独のなかに彼はいたことでしょう。しかしその孤独のかで使徒ヨハネは、生けるキリスト、復活のキリストから希望のメッセージを受け取ったの

この真理をあかす実例で満ち溢れています。例え聖書の最初の方に出てきます、モーゼという人のことを少し考えてみましょう。彼は、あの古代エジプトの王宮で育つた人であります。が、青年になって自分の出身がイスラエル人、つまりヘブル人であるということを知ります。そしていつかは、自分の同胞のヘブル人を助けなければならぬと思つていました。若気の至りである事件を、そこで彼は起してしまいます。そしてそのことがエジプトの王パロの耳に入ることとなり、モーゼは追われる身となります。モーゼにとって、エジプトに生きる道は全く閉されました。彼は、遠く離れたミデアンと云う土地に逃れるのであります。彼にとって、それがどんなに大きな試練であつたことでしょう。人生の全ての戸が、閉ざされてしまうような経験であったと思います。ふるさとから遠く離れたミデアンの土地で、ひつそりと羊を飼つて生活をします。もう自分の人生は、これまで

であります。それがあの默示録のメッセージであります。

そして默示録は、この二千年の間、世界中の人々に影響を与え続け、苦しみの中にある人々に計り知れない希望をもたらしてきました。この世界が続く限り、默示録のメッセージは、世界中の人々に希望を与える続けるであります。人生のすべての戸が閉ざれてしまったと思われたときに、世界をゆるがすような啓示が、神さまから、使徒ヨハネに与えられたのであります。彼が迫害を受けてペトモスに流されたとき、まさに神さまから、あのような啓示を受けたことは想像だにしなかつたと思います。

しかし神を愛する人々、即ち神の「計画に従つて召された人々には、神が全てのことを働くとして益として下さいます。私たちは人生の試練に遭遇するとき、誰れにも判つてもらえないような苦しみにあるときでも、神さまは、私たちの希望と将来のために、実は特別な「計画を備

えていらっしゃいます。ですから、私たちの人生の戸が私たちの目の前で無残に閉ざされると、希望を失なってはいけないと思います。私たちの望む通りに物事が進まないからといって、あるいは、誰かが自分の人生を台無しにしたからと云つて、自暴自棄になつたり、人生をあきらめたりしてはなりません。

今回の聖書のみことばは、私たちの状況を通して働く聖霊のみちびきに、心の耳をすまし、心の耳を開くことが最も大切であることを教えてくれます。「こちらに来て、私たちを助けて下さい」というマケドニア人の呼びかけが、必ずどこからか聞こえできます。神さまは、私たちに語りかけ常に教えようとしていらつしやいます。「これが道だ、これに歩め」と私たちにあらゆる状況を通して語りかけようとしておられます。ですからどんなつらいときにも、どんなに道に迷つたと思われるようなときにも、「主よ語り給え、僕聞いております」と、

そのような信仰を以つて臨んでゆきたいと思ひます。

今からもう三十五年前、私はアメリカで牧師になるための神学校の学びを終えて、妻とともに日本に帰国いたしました。その時の私の考えは、自分はアメリカでイエス・キリストに救われ信仰に入り、アメリカの教会で信仰を育てられたので、日本でこれから働くためには、どこの教会で副牧師か何かのお手伝いをさせて頂きながら日本での伝道を学びたいと、そのように考えておりました。

いろいろな方に相談もし、又お願いもし、どこの教会で私たちを受け入れてくださるところを待ち望み、祈つておりました。その間、私どもは故郷の四国の中高で待機しておりました。若い私どもは、呼ばれればどこへでも行くつもりでいました。北海道であろうと、九州であろうと、地の果てであろうと呼ばれるところへはつて直ぐ行くつもりで両親のところ

で待機していたのであります。しかしいつまでたつても、どこからもお呼びがかかりませんでした。いろいろと打診してみましたが、はつきりした返事が来ません。そういうしていいるうちに、数ヶ月が経つてしまいました。聖書には「働くがざるもの食うべからず」と書いているではないかと、ちくりと嫌味を云われる時もあります。もうそろそろ親の経営している会社の社員になつて働いたらどうか、とも云われました。これから将来、一体どうしたらいいのだろうか、中ぶらりんの状態が続いていたのであります。

そんな時、突然、私が原因不明の病気になつてしましました。救急車で病院に運ばれました。運び込まれた直後に全身が麻痺状態になり、手足が氷のように冷たくなり、激しい痛みを伴いました。身体のどこも、自分で動かすことができなくなってしまいました。その痛みで、私は思わず叫び声をあげました。まるで地獄にいるような苦しみを味わいました。その苦しみ

の中から、私は心中で叫んでいました。神さま、私はここで死ぬのでしょうか。何のためにあなたは私を救い、しかも牧師となるための勉強をさせ、日本に戻されたのですか。ここでこんなふうに死ぬためだったのですかと、激しい痛みのなかで私はうなされ続けました。時が経つとともに、身体の麻痺も少しづつやわらいできました。でもその病気が治るのに、それから何ヶ月もかかりました。毎朝起き上がる元気もなく、ただ横になつて本を読むことぐらいしかできませんでした。

そんな時に、一冊の本に出会いました。それは榎本保郎先生の「ちいしば」という小さな本でありました。変な題の本だなあと思ひながら読んでおりました。ところがその本に、私はすっかり魅きつけられてしまつたのでした。それは榎本先生が京都で開拓伝道をした、その記録の本がありました。読みながら笑つてしまつたり、涙がにじんできたりするのでした。そんな

て、その頃から私の病気も次第に治つてきたのであります。まるで神さまが、私が故郷で開拓伝道にいたる決心をするまで、私の身体を動かせないようにして、そこに縛り付けたかのようでありました。きっとそうだったのだろうと思ひます。

その時、私は妻と小さな家で開拓伝道を始めました。誰一人としてクリスチヤンのいなかつた私たちの家族が、次々とキリストの救いに授かっていました。そして近隣の人々のなかにも、信仰に入る人々が起こされてゆきました。みことばの通り、神の宮であるキリストの教会が建ちあがりました。神さまは、私たちの考えと思いを大きく転換させるために、あらゆる戸を一時閉ざしてしまわっていました。そして私が、本気で神さまの心を聞くようにと導いて下さいました。

愛する皆さん、私たちの主なる神さまは、愛と希望の神であります。神さまを信じて従つて

ことがあつたある夜のことです。聖書を読んでおりましたら、旧約聖書のハガイ書の一章七節、八節にある御言葉が、私の耳に焼き付いたのであります。「万軍の主は、こう仰せられる。あなたの方の現状をよく考えよ。山に登り木を運んできて、主の宮を建てよ。そうすれば私はそれを喜び、私の栄光を表わそう」。このみことばが、私の心に強く響いてきたのであります。そしてそれから何度も何度も、主のみことばが私の心にせまり、ここから離れないのであります。

このことはひょっとして、神さまが私に「ここ自分の故郷で、この町で、神の宮である教会を建てよ、ということなのだろうか。何日も何日も考えているうちに、その思いがますます強くなつてきました。そしてついに神さまは、私どもに、「ここ高知でキリストの福音を宣べさせるために「キリストの教会を建てよ」と云つておられるのだと受け止めたのであります。そし

くる者を、決して見捨てたり、見放したりは致しません。

いろいろな試練にさらされても、信仰と希望を軽んずることがないようにして行こうではありませんか。神さまが、私どもの人生のある時期、あるところで戸を閉されるように見えるときも、実は、神さまは特別なご計画があります。それは、あなたに希望と将来を与えるご計画です。試練とともに、必ず脱出の道をも備えたもう、お方であります。神さまは、眞実のお方でありますから、私たちが耐えることのできないような試練に会わせることはありません。ですから、常に信仰の目を覚させて、マケドニア人の叫びができる、心の備えをしようではありませんか。そして神さまのみことばをさぐり、「語り給へ主よ、僕、聞きます」、という信仰の歩みを続けようではありませんか。ひとつと、お祈りいたします。

愛する主よ、あなたの名は、不思議と呼ばれて います。まことにあなたは、私たちの人生を、不思議な方法で導かれます。時として私たちは、あなたのみ旨が見えなくて苦しむことがあります。どうかにぶい愚かな心をお許しいただき、あなたのご計画のなかをまっ直ぐに歩むことができるものとさせて下さい。あなたのみころを、悟るに早いものとして下さいますように。そして、たとえあなたのご計画が判らずに苦しんでいるときにも、必ず私たちの背後にあって、確かに導いて下さっていることを信じて歩むことのできる、堅い信仰を与えて下さい。そしてあなたの導きを確信する時には勇気を出して、あなたの示される道を雄々しく歩むものとして下さいますように。

私たちの主、イエス・キリストのみ名によつてお祈りいたします。アーメン。(神学博士)

平成十九年十一月十八日 玉川神の教会にて

(文責・佐々木)

昨年十一月十八日の日曜日、午前十一時から、牧師、福江等先生の説教を、玉川神の教会の日曜礼拝で聞くことができた。

福江先生の説教には、いつも礼拝に見える多くの人たちに、信仰の道について感動と喜びを与えて下さることで、畏敬の念を抱く方々が沢山いる。かつて私も度々、福江先生の説教を聴き、畏敬の念を持つて接していた一人であつたが、先生はその後マニラに宣教に赴かれて、久しくお会いできなかつた。当日、私も奇しきめぐりあわせに招かれて、福江先生の教説を、六年ぶりで、つましく聞くことができた。先生の説教は神の僕として慎ましく、謙虚に、神を讃美するものであるが、単にキリスト教信徒に限らず、全ての人々に共通した心構えとして、等しく捉えることができると確信して、ここに掲載した次第である。

人は、苦難に直面し、苦しい受難に遭遇する

時、決して絶望におちいることなく、これに耐え忍んで時を待てば、必ず活路が拓けるとし、神は、時として私たちの行く手の戸を開ざされると時があるが、神は、又脱却する道筋も必ず備えていて下さるので、諦めて自暴自棄に陥ることなく、夢と希望を持ちつづけて、将来に向かって生きてゆこうと、静かに力強く説いておられるのである。

日常特に、経済的困難に遭遇する時の企業経営者はもとより、ビジネスマンにとつても、そして色々な職場で、仕事の艱難辛苦の試練に耐えてゆけば、自信と自信と希望を、神さまから与えられるものであるとし、教えは現実的であり、積極的であり、感動的である。今回、牧師のご快諾を得て、当日の説教の内容を会員各位にお伝えできた事を感謝する次第である。

私は席上、心境を左記の和歌に詠み、熱き思いをそのままに記して、福江先生ご夫妻にお渡しさせていただいた。



謹 詠

佐々木 誠吾

十一月十八日・詠

みことばを取り次ぎたもふ福江師の神の
僕とへりくだりけり

人生の道と奥義にふれかたる師の生きざ
まの熱きあかしに

福江師の聖書を通しひとすじに主のみこ
とばを打ちあかしけり

みことばの心打たる取りつぎに熱きま
なこに仰ぐ十字架

福江師のパウロ先生の道のりを踏みしめ
かむけはしこの道

主のために思ひと心と力をつくしてゆ
福江師の荒き習ひのこしかたを振りかへ
り説く神のみことば

艱難と辛苦にたへてみことばの安き祈り
に望みわきいづ

仮題

経済と景気の動向について

講師 三原 淳雄 氏

経済評論家・株式評論家

日時 四月八日（火）午後六時

会場 八重洲富士屋ホテル

三階『赤松の間』

昭和経済会 事務局

か。「都合をつけて、一度遊びに来たら」とい
う明子の優しい誘いと、「ニューヨークの明子
の様子を見ておかないと心配だ」という妻の気
合いで運よく一致したのかもしれない。ぜんば
んの四泊五日をニューヨークで過ごし、後半の
四泊五日をロサンゼルスとラスベガスで過
ごした。もとより目的は明子のいるニューヨー
クである。そこで去年の4月二十九日から始ま
ったゴールデンウイークを使って、ニューヨー
クに旅立つた。ニューヨークに行つて見て大変
良かつたと今になつて思い返している。

気負いだつてニューヨークの旅と題して昭
和経済の後記隨想に一気に書いたのはよかつ
たが、これを連載して発表していくと細切にな
つて、時の流れで次第に鮮度が落ちていってし
まう。何時になつたら本番に入るのかも目処が
付かない記事になつてしまつて。今になつ
て手心を加えては、これまた当時の印象描写が
かすんでしまつるので痛し痒しのジレンマにあ
んでいるとは思えない感覚で、これまで私たち
夫婦は過ごして來ている。娘がニューヨークの
仕事と生活にも慣れてきた頃合いなのだろう

寸 評

父と娘

佐々木誠吾

娘の明子がテレビ東京ニューヨーク支局に
赴任したのは一昨年七月の七夕の日である。八
月一日から（日本時間、五時四十五分）現地に
てニュース・モーニング・サテライトに颯爽と
出演し始めた。取引を終えたニューヨーク株式
市場の結果と、世界各地のマーケットの動きや、
経済各種の指標、そして最新のニュースを中心
に日本にいち早く報道してくれる。とりわけ經
済人にとっては、最初で、重要な番組である。

毎週、月曜日から金曜日にかけて早朝五時四
十五分からのテレビでフレッシュな明子を見
ているので、彼女が地球の裏側の、遠いアメリ
カのニューヨーク八番街五〇ストリートに住
んでいるとは思えない感覚で、これまで私たち
夫婦は過ごして來ている。娘がニューヨークの
仕事と生活にも慣れてきた頃合いなのだろう

る。

もっともこのチャンスを捉え當意即妙にいろいろなことを書いていくことを、各位には予めお伝えしていたが、赴くままにペンを執つていたら、際限がないことが分かつてきた。でも中には面白くて読みがあるので云つてくださる方も多いので、躊躇なくそのまま載せていくことにした。

これは私の内心であつて人さまに明かすものでないが、(明子の優しい心根と、優れた才智、飾らぬ美貌)に感動して帰つてきたのである。

父として、これ程の幸福感を味わつたことはない。どちらかと云うと、わたしは娘に対しても父親らしいことは何一つして来なかつたし、いつも突き放してきたように思つている。お恥ずかしき限りだが、世間一般で云う「父と娘との触れ合い」などと云うことは何一つ思い出せない。なのに今回、明子は、この無責任な父を温かく迎えてくれて内心びっくりしている。未だ生々

しく生き、好奇心旺盛な父を優しくもてなし、見知らぬニューヨークの街中を、しかも忙しい時間をぬつて懸命に案内してくれた。この体験は、私の心身に大いなる刺激を与えてくれた。隨性に走り勝ちな小生に、生命の息吹きを吹き込んでくれたのである。たつた五日間の滞在であつたが、その間に主要な部分は捉えた来た。ちなみにニューヨークに滞在したダイジエスト版として、左記に記しておく所存である。恐縮ながら、各位のご理解をお願い申し上げる。

四月二十七日（到着十時）、ケネディ空港に着いた時、雨は篠つく豪雨だつたが、しばらくして神の助けか、天の恵みか、すっかり晴れ上がり、快適な天候である。時差ぼけもなく、迎え出た明子と一緒に空港から、ニューヨーク・マンハッタンのミッドルタウンにある八番街の五〇ストリートのアパートに元気に到着、広い部屋に入った。

午後、多少疲れ気味の妻が部屋で仮眠中、一足先に私は明子に就いて外出した。五番街を漫遊して、かのロックフェラー・センターや広大なセントラル・パークの周辺を見、二時間をして帰つてきた。休養をとる意味もあつて、近くのレストランで遅い昼食を取る。街中を過ぎて明子のアパートの部屋に行き、くつろいだ雰囲気を味わつたあと、近くの我々の寝泊りするホテルに案内される。

ホテルは明るく綺麗で広い間取りである。持ち物を整理してからそそくさと外出。先ずイエロー・タクシーに乗つて、ダウン・タウンの豪華なステーキハウスに急いだ。明子の友だちでダンサーを修行し、今や教授の立場で安定した由香ちゃんが見えて懐かしく歓談して、時がつという間に過ぎて、深夜のグランド・セントラル駅を見て、第一夜が終わつた。

二日目、九時起床。十一時、明子が迎えに来

る。下のレストランで朝食。エイト・アベニューから地下鉄に乗つてブロード・ウェイを南下、バッティリー公園からフェリーに乗つてハドソン川に浮かぶリバティ島の「自由の女神」を目指す。あと海上を遊覧。マンハッタンに再上陸後、ゴールドマン・サックス本社訪問、ウォール街に入る。興味尽きなく周辺を見学。四時半、ホテルに着く。

五時半、近くのイタリアン・レストランで夕食、そのままブロード・ウェイに出、八時から開演のミュージカル「オペラ座の怪人」を観る。ストーリーはもとより、スケールの大きな舞台装置に驚く。終演後、夜のタイムズ・スクエアの雜踏の中を楽しみ、不夜城の街を探訪し、十一時帰館。

三日目。九時起床。氣疲れの明子を思いやり、午前中は試しに陽子と街中の探索、探訪に出て見る。ここはニューヨークだ。気持ちは相変わ

らず躍動する。血湧き、肉踊る心境である。携帯電話を持たずに出たので、明子との連絡が出来ず慌てるが、途中尋ねながら何とか道を覚えつつ、セント・パトリック大聖堂の礼拝に出る。

帰館。明子と昼食のあとしばし休憩する。

そして再び、今度は妻も一緒に三人で街に出る。爽やかな天気である。テレビ東京の職場とスタジオを見学。明子の専門的な案内でニューヨークの名だたる中心街をくまなく見て満喫。ブランド街で買い物もする。帰館四時。

イエローキャブを掴まえ、ローワータウンへ向かう。六時、埠頭から出港する夜の豪華遊覧船に乗ってハドソンリバーを南下。豪華ナイト・クルーズを楽しむ。目指すは月光のもと、「自由の女神」の荘厳な姿と、展開するマンハッタンの全夜景である。正装で出席である。明子は豪華な夜会服である。妻も豪華な衣装を用意してきている。客船の窓際の席を予約してくれた。シャンパンで乾杯、懐かしいアメリカ合

七時からの夕食を一階のチャイナレストラ

ンでとる。職場でお世話になっている記者の足立さんを交え楽しく歓談して、ニューヨーク滞在最後の夜を過ごす。明日は早朝の飛行機便で愈々ロサンゼルスに向かう。滞在中に短歌を既に三百首ほど詠んで記している。

ニューヨークの街中では地下鉄や、イエロー・キャブ、シティ・バスにも乗つてみた。色々な食べ物の店にも入つてみたし、ブランド店やスーパーで買い物もした。実に楽しかった。イタリア製の靴が大分磨り減つたが、気力充実して身体の疲れを覚えなかつた。そしてコンパクトに、確実にニューヨークの街と実態を捉えてきたつもりである。色々なことも含めて、私は、広い世界の入り口を知ることができた。その世界は広大であり、若者が憧れるのは無理がない。アメリカン・ドリームは脈々として生きている。大陸は、光に満ち充ちて、魅せられた魂が広く

衆国メロディーが生演奏で流れる。四時間にわたる豪華遊覧を楽しむ。十二時帰館。

四日目。連休のあと、明子が会社に出勤である。朝早く起床。迎えにきた明子と一緒にホテルを出る。途中、軽い朝食をとる。途中で明子を送つたあと、妻と二人で再び街中を散策、でかけるかぎり見聞に歩いた。明子と一緒に歩いた道と重複するも、更に距離を伸ばした。正午ホテルに戻る。

午後から、市内観光の観光バスに乗車。セントラル・パークを皮切りにマンハッタン南部の街中をバッテリー公園までくまなく通う。さまざまな街と住人でアメリカの多様性を見て帰途。我々だけが摩天楼に登るため途中で下車。エンパイアステートビルの最階上まで行く。ニューヨークと、その先に広がる広大な大地を、華やかな夕映えの中に遠望する。帰館六時。風呂に入る。

逍遙するものだつた。

常日頃私は、感覺的には古い人間ではないかといわれるが、自分自身は意外とナイーブで、内氣で情緒的ではないかと思つてゐる。娘の場合、親子の関係は穏やかで普遍的であり、みんなに共通したものである。そのよい例が、小津安二郎監督作品の映画、『東京物語』である。父扮する笠知衆であり、娘扮する原節子である。モノグロ映画は陰影もこめて、今も活き活きとしてもやさしく伝わつてくる。娘を思う寡黙な父の情愛が、ふつぶつと伝わつてくる。

私に対する明子の存在も、青臭い書生のたわ言にも似てきて恐縮だが、妻と同様、かけがいのない女性である。明子が職場で活躍している姿を見ると、いまだ職業人として、一人の人間的存在として高く見てしまうのである。親にとつてはうれしい違和感とでも云うべきか。どこのご家庭でもそうであるように、同じように孫たちの成長を楽しんでいた祖父母が、いま生き

ていたら、どんなに喜んでくれたろうとも思つてみたりする。

机上の上で考えていたアメリカも、現実に飛び込んでいつてみると、広漠として果てしなく、力強く躍動する多民族国家の大國であり、将来の地球のあり方と、人類の生存と在り方を示唆するものである。民主政治であり、その手法で選ばれた大統領は、時に魔がさして変なのが出てきてしまふが、ブッシュもこの辺で悪名を歴史に残して退陣するはずである。基本に民主主義が伝統として息付いている。そこが暴走を食い止めて、安心である。

その実態は現実には歴然たる事実として肯定しうるものである。しかも思想を越えた人間存在の、如実感の充ち溢れた様様に映つた。自由と責任は表裏一体であり、権利と義務も同様である。平和と民主主義の根幹を成すものである。「無秩序のなかにある統一性」、「雑多のなかにある調和性」、「自由のなかにある協調

性」、「格差のなかにある帮助性」、「激しさのなかにある穩健性」、それらは全て、人間の本性を見据えて、活き活きとした人間の思索と英知がもたらすものである。

矛盾と葛藤で、苦惱のこの世だが、人類の理想をかざした「自由の女神」はその象徴的標榜であり、姿ある。その自由の女神を真ん中に、妻と明子と三人で撮った写真は実際に素晴らしい。ニューヨークのケネディー空港についてから、明子と行動を共にした五日間を、この欄で時間、空間の広がりを以つて素早く綴つたりである。その内容も、今からすると舞台と状況が違つてきているから、それだから又面白いのかもしれない。この記事を書き急いで四ヶ月しかたっていないが、驚くべきは世の中の内外の激しい変容振りである。

心の動搖を防ぐために、時に、私は蒼穹にきらめく満天の星を仰いで、悠久の間を心にとどすことにしている。 一〇〇七・八・十日記

わが回想記

早稲田大学名誉教授

堀江 忠男

アフリカの飢えと日本の使命

(一九八四年十一月十五日記)

五十万余りが餓死し、「飢餓人口」が八百万近い。アフリカ全体では、「食糧不足国」は二十七ヵ国、救済には今後三年間に百八十億ドル（四兆四千億円）が必要だという。

どうしてこんな惨状におちこんだのか。国際政治と国際経済のからみ合いのなかにおける人災という感が深い。一九六〇年代に続々独立したアフリカ新興諸国は、かつて旧宗主国同士の繩張り争いで、現地住民の意向と関係なく定められた領土なので、経済自立の条件を欠く国がほとんどである。しかも独立以来、部族間の反目が表面化し、それが米ソの勢力争いとからんで拡大され、深刻化しているケースが目立つ。この明るさに大きな暗い影を投じているのが、アフリカ大陸の飢餓だ。「点滴を受けていたタール君の首が、突然ぐんと垂れて、目の前で息を引き取つた。」エチオピアのある国際救援センターでの一場面。朝日新聞特派員の記事の一節である。人口三千万余りの同国で、今年もうだらう。

この明るさに大きな暗い影を投じているのが、アフリカ大陸の飢餓だ。「点滴を受けていたタール君の首が、突然ぐんと垂れて、目の前で息を引き取つた。」エチオピアのある国際救援センターでの一場面。朝日新聞特派員の記事の一節である。人口三千万余りの同国で、今年もう

経済的には、国内に豊富に産出する鉱物その他諸原料を先進工業諸国に輸出して工業化を図り、農業開発を軽視してきた。先進工業諸国は金融業者はその開発融資で大きな利益をあげた。そこへ襲来したのが、第一次、第二次の石油

ショック不況である。アフリカの第一次産品の

価格は暴落して、国際收支は悪化し、不足食糧の輸入代金支払いに差しつかえる事態になった。

そうちかといつて、食糧自給を可能にする農業開発が急に間に合うはずがない……。

飢餓諸国に共通な因果の連鎖をたどると、ほぼこんなことになる。だから、アフリカへ食糧や毛布を送れば、目先の役には立つが、基本的には、農業開発のためのかんがい施設、食糧輸送の道路建設、さらには現地政府の農地改革から政治的安定の確保までの取り組みが必要なのだ。

ガーナから日本へ留学中のクワベナ・アビート氏が次の提言をしている。

「米ソ両超大国は特定のアフリカ諸国に経済援助を優先させるようなことはやめてほしい。日本は、『平和の使者』、仲介者としてアフリカの政治的安定を促進してもらいたい。」（『ジャパン・タイムズ』十六日付）

約は有効であつたことを確認しておこう。

一九四一（昭和十六）年四月に締結されたこの条約は有効期間五年、期限満了の一年前に廃棄の通告がない限り自動的に五年間延長と規定されていた。ソ連は一年前に廃棄を通告してきた。従つて、条約は一九四六（昭和二十一）年四月に失効することになっていた。廃棄通告の背後にどんな事情があつたのか。一九四五（昭和二十）年二月十一日に調印されたヤルタ協定で、スターリンは、ルーズベルトとチャーチルに、ドイツ降伏後二、三ヶ月以内に対日戦争に参加すると約束したが、その参戦条件のなかに「樺太南部のソ連への返還」と「千島列島ソ連への引渡し」があつた。そんな背信行為のあつたことを知らぬ日本政府は、ドイツ降伏後、ソ連に戦争終結の仲介を依頼することと決定、ソ連政府に働きかけたが、その意図を察知したソ連側は話に乗らない。そのうち「ポツダム宣言」の発表、ソ連対日宣戦布告となり、わが国固有の

「ポツダム宣言」前後

（一九八五年七月二十七日記）

四十年前の七月二十六日、日本の降伏条件を通告した「ポツダム宣言」が発せられた。日本の領土については「本州、北海道、九州、四国およびわれわれの決定する諸小島に局限される」と述べていた。日本は翌日朝の放送でこの宣言を知り、二十八日、鈴木首相がこれを「無視する」と述べた。

ソ連政府は八月八日、次のように通告してきた。「日本政府のポツダム宣言拒否により、日本のソ連に対する終戦斡旋の依頼は基礎が失われた。ソ連は明九日から日本との戦争に入る」。ソ連軍は九日未明、満洲に進攻を開始した。

日本降伏の日、十五日の三日後、十八日に千島列島への進攻を始め、わが国固有の領土、捉捉、國後、色丹、歯舞まで占領した。作戦完了は九月三日であった。終戦の時点では、日ソ中立条

領土まで占領してしまったのである。

日本は戦後、四島返還を主張してきた。一九五六（昭和三十二）年、鳩山首相の訪ソによつて締結された日ソ共同宣言では、平和条約が締結されたら歯舞、色丹は返す、と約束している。

一九六四（昭和三十九）年九、十月にモスクワを訪れた日本の国会議員団に対し、フルシチョフ首相は「米国が沖縄を返したら、ソ連もすぐ返す」と述べた。ところが、日中正常化が進むにつれ、ソ連の対日態度は硬化し、一九七六（昭和五十二）年の第二十五回共産党大会でブレジネフ書記長が「両国間に領土問題は存在しない」と強弁した。これが現ゴルバチョフ政権まで繼承されているのだ。

以上のいきさつを振り返ると、大国の横暴、御都合主義を感じるとともに、北方領土返還要求の正当性が再確認される。わが国としては目的を達するまで話し合いを粘り強く続けるべきだろう。

昭 経 俳 壇

遠 藤 蘆 穂

ひれ酒の匂ひによひし下戸ひとり 三 郎 春めきて愛しき人と丸ノ内

◎鮟鱇鍋赤ちやうちんの剥げかかり

◎凍蝶やふるれば眼まなこひらくらし 千鶴子

水かけて女おかみ将鮟鱇の吊し切り

寒椿表札の文字新しく

○丹念に炭つぐ宿の老婆かな

春冷えのメトロの出口迷いけり

山峡の夜に相應しき炭火かな

早春賦小鳥は花になに歌ふ

ゆらゆらと陽炎たちぬ伊豆七島

沈丁の吐息まじりの昼餉かな

虹色の鳩の飛び立つ春寸の景

干し大根老女一人の作業なり

春一番市民講座の舞つてをり 悟 風

水仙も今日で終りの安房の雨

猫の恋犬吠ゆるほど凄まじき

まだ若き氣持にもどり梅咲けば

春めくや天龍川に舫ひ舟

○弧を描き浜辺は菜花の道遙か

黄砂降る廃校跡の土俵にも

山頂の荒れし祠や紅椿

○公園の霞のままに太極拳

わら灰に咽び馬鈴薯種作り

鳥帰る遺骨未だに異国之地

阿蘇山のふもとにひつそり石蕗の花 長谷川

○ ひれ酒にみだれてもみる仲居かな

○ 鏡餅束の稻穂載せて置き

きねつきの餅にふさはし備長炭

節料理五段重ねは親ゆづり

餅を切る煩わしさや代がわり

読みふける徒然草や春の宵

床の間に二段にかまへる鏡餅

寒明けの薮の道分け東大寺

もうろうのなかに我あり春の宵

土髯をつけし大根届きけり 山人

水餅をかめよりすくふ尼僧かな 富貴男

俵ほぐして備長のかんかんと

万燈のともる元旦興福寺

柚子の実を手まりに遊ぶ野天風呂

草千里寒さに牛も動かざる

信州のそばの仕上げは寒ざらし どんぐり

白魚をしのぐ白さや富士の峰

山茶花も宿のこぼるゝ湯につかり

○ 孤独の身行く先々に冬銀河 海 静

那須丘をかこむ冬田の広きかな

網走の空にも矢張り冬銀河

芝焼きて咽ぶ村の衆減つてをり

新玉の年を老師と迎へけり

○ 村は過疎野火の煙の一巡す

ひとり飲む屋台の酒や寒の月

芝焼きて甲斐なき衆に案山子立つ

本牧の新居にこもり寒明くる

ふるさとの山の匂ひの春めきし

表紙絵のことば

伊豆の風景・江之浦港

関根常雄

表紙絵のモデルとなつた場所は、旧東海道線の小田原駅の先で、早川駅の次にある根府川駅です。ホームに降りて、すぐ真下に見える小さな漁港の風景です。由緒來歴は知りませんが、箱根の山は天下の剣を背にして、居ながらにして長閑な霧廻気の漂う港です。根府川駅のホームから見おろすあたりは、垂直に落下しそうな断崖続きの地形です。そんな所に蜜柑の木が植えてあり、この風景は、私にとつて大変めずらしい景色に映りました。

私の生れた地方には蜜柑山と海がないので、この景観が印象強く心に残り、美しいなあと感じたのです。上から見ると、急な坂道が海に向

つて続いており、道に沿つて両側に蜜柑畑がはりつくように作られています。その蜜柑畑から遠くを望むと、小さな江の浦の港が見えます。風景画には最高のロケーションです。私は、早く速スケッチをしました。

これを油絵に描き一九八九年、上野の都立美術館で開催された公募展の「大調和展」に出品したところ、初入選の栄冠を得、私の思い出の自信作となりました。一号室の一一番目に付く所に飾つて頂き、大変感動したのを今でも忘れることはできません。

今回の表紙絵は、その時を回想し、童心に帰るような心境で描いたものです。描く絵には、時として、その時の気持を再現して、更に探究心を求める楽しみもあるのです。無意味なような心境でも、蕪村のように、絵師でありながら、俳句の名人で有名な方もまれに居ります。

「春の海しねもすのたりのたりかな」 蕪村

後記隨想

佐々木誠吾

二、ニューヨークの旅 (七)

経済学の講義で、経済地理という科目があつた。当時、二、ニューヨークに行くなどといつたら、大変な騒ぎであった。今でこそ日常的で、簡単な渡航であるが、当時は馬鹿々々しいくらいな世相であり、大袈裟なものだつた。出征男子を見送るよう毎日華々しい歓送会に明け暮れて、行く本人も関係者も、まるで天下を取つたような騒ぎだつた。私が経験した例では、無論飛行機なんかではなく、横浜港出港であり、何週間がかりの客船の渡米である。あるいは貨物船だつたかもしれない。出るまでは格好をつけていたが、入つたとたんに船底のわら布団に寝泊りしたそうである。文字通り、鶏は自分の糞の上では王様である。ものは考えようでどうにでもなる。

戦後十数年たち、昭和三十年代後半にもかかわらず、日本は再建の途上にあって貧乏丸出し

戦前から、贅沢は敵だと徹底的に教え込まれたから、貧乏には慣れている。むしろ美德と心

得てきた。開拓精神旺盛なアメリカは、文明国として経済の繁栄を謳歌していたし、もともと豊かな資産を持つた超大国である。日本は思想的には哲学を持たず、非科学的であり、そもそも神國だ、神風だと作り話で現実の世界に挑んだ最低の民族であり、反省の余地すらない。日本が世界に仕掛けた戦争自体が、岩にコップをぶつけるようなものであり、象の皮膚を蟻がかじるようなものだった。洗脳した指導者は地獄の底だが、乗せられた国民も、無知蒙昧にして、愚民だった。自業自得である。ましてやアメリカは戦勝国であり、生活レベルは、日本とでは天と地の差で垂涎の的であり、想像の世界であった。負けた日本は国民が如何にして食べてその日を暮らしていくかに懸命な、どうしようもない貧乏国だったのである。馬が糞を落としながら銀座の数寄屋橋を渡っていた戦後の数年である。タバコの吸殻を拾っているのは当たり前で、落していく馬糞を拾って売る奴もいた。

人間愛と親子の情愛に触れる作品だった。日本でも唯一の交通手段の自転車は貴重だった。日常、自転車泥棒が横行した。自転車をこいで逃げていく泥棒、それを追っていく被害者、両者とも懸命だった現場を幾度も目にした。イタリア映画の影響でもないが、自転車を盗んで懸命に逃げていく泥棒に、なぜか同情していたのである。

色々な文化の情報がようやく人伝にめずらしく、興味深く入ってきた頃であった。だからこそ経済地理などといつた初步的な科目が大学でまかり通ったのである。佐藤弘氏は一つ橋大から来ていたが、当時ベストセラーだった「はだか隋筆」を書いた学者である。今だつたらどの大学でも通じないかもしれない。比べて農業経済学でケネー研究の大本、久保田明光、英國産業革命史の小松教授など、学者らしく古典的で氣品があつた。知識人から氣品を学ぶことも大切である。基本的な原理原則論としては

今の北朝鮮や、アフリカのウガンダみたいな国だった。

だから戦後の闇市だけがマーケットだった日本国民にとっては、外国が未知の世界であり、どんな国か興味津々の時代だったから、中学校の授業のように地球儀を回して居ればよかつたのに、天下に名だたる学問の府でも地理が科目として受けたのであり、経済という文字をつけて、最もらしく受講させていたのである。一ドル三百六十円の固定相場の時代で、渡米は高嶺の花だった。アメリカへ行つてきた人は、帰朝報告として各地で受けて拍手喝采だったのである。小学校の講堂あたりで開かれると、地下足袋や、長靴や、草履を履いたみすぼらしい貧乏人たちが粋がつて話を聞きに、わんさと押しけどきもあつた。戦後のイタリア映画は芸術的高さを誇っていたが、「にがい米」は女優シルバーマンガーノの圧倒的な肉体美に翻弄され、「自転車泥棒」は社会的混乱の中で暖かい

立派な学説を練り広げたが、もはや現代経済社会に通じるものでないことは当然である。しかし、学者としての品格は歴史に残つて、後の学徒に大きな影響^{はやき}をもたらして、教えは生きている。時代の流行に受けても原理原則のないものは、所詮それだけのものであつて、泡沫的存在でしかない。

一般的に性的描写について刺激の足りなかつた当時としては、異色的だった。教壇に立つと講義そっちのけで弁証法論的展開を以つて著書の猥談的記述の正当性を宣伝し、発行部数の更新中を黒板にでかく書いて満面に笑みを湛えていた。言わんとするところは、自著の売上が増加中ということであつて、講義には関係ないことであつたが、炉辺談話を経済学に結び付けて、己の経済的所得に結びつけるところが他の教授と違つていた。隋筆は、当時としては確かに面白い内容である。自分の稼ぎと切り離して、判りにくい弁証法的論述を、身近な実例

を持つて説明するので、受けやすいことは確かである。

称して男女の「小便、放尿的弁証法」である。内外タイムスに載った女優丹下キヨ子との猥談、対談記事の話題で講義を沸かせて済ませ、それが試験問題に載つたのだから、破天荒で人を馬鹿にした話だが、真つ正直に書いた奴は落第し、問題をそらせて、狡猾に弁証法学的に書いたものは及第した。そこが佐藤弘の面白いところだった。

しかしながら、血氣盛んな学生諸君の間でも、そのマンネリズムにだんだん飽きが見えてきた。頭に血がのぼるだけであるからである。聞くほうが飽きてくるのだから、当人はもっと飽きてくるだろう。何處に行つても念佛みたいにくつちやべっているのだから、馬鹿馬鹿しくなつて来たに違いない。しかし食うためである、少々のことぐらいは我慢しなければならない。常に自著の売上更新中を気にしながら、念佛となつたに違いない自説を繰り返して、役を務め制心を働かしてもらいたいものだ。

そうでないと、学園での学生に対する示しがなかなかくなってしまい、この社会は何処まで零落していくか分からぬからである。将来の社会を、我々は教育者にかけているからである。立派な教育者は沢山いて、一部の狼藉的な人物の振る舞いが余りにも大きいので、実際には思い違いも甚だしいのである。関係者には自ずと自制心を働かしてもらいたいものだ。

しかし考えてみると、未だしの感を禁じえないのである。教授の堕落が始まつたのはこの頃からである。今の学者はどんどんと外に出て働いている。金勘定に落ち着く暇がないだろう。マスコミ沸騰の時代であり、情報化時代であり、通信技術の発展時代であればこそ、学内だけにとどまらず、知識の乱売で大もてである。知名度が上がれば、なおさらであろう。当時、一つ橋の伊藤整は、太陽の季節を書いた石原慎太郎を発掘した人として有名だが、彼自身は、女性に関する十二章を執筆発行した。これも一世を

風靡した。ローレンスが書いた「チャタレイ夫人の恋人」は伊藤整の翻訳だが、表現が猥褻か文学かで派手な裁判沙汰になつて物議を交わした。今だつたら見向きもしないだろう。あの物議をかわした大学教授、兼作家、評論家だからさぞかしだろうと、出版社は當て込んだが、売上は期待したほどではなかつた。佐藤弘のほうが上手だつた。いずれにしても、あの程度で世間が大騒ぎした時代である。性的描写については当時と今とでは隔世の感があつて、今は奔放のままに過ぎて慢性化され、無感覺にさえ陥つてゐる。週刊写真雑誌のフライデーなんか、凄いもんだ。若い者たちが良く立ち見している。しっかりとした内容の写真雑誌は、人々の関心が極めて高いし、やってみれば大当たりすると思われる。時事性の高い現場写真もどぎついのが濃いと、結構、広く読者層を取り込めるような気がする。小生なんかは、そうした傾向を支

ているわけである。

爾来、学者がこうした洒脱的エロ本を書く傾向になつた。皮肉な結果だが、執筆業を持つて副業とし、教授が象牙の塔に閉じこもらず、学外に出て行つて講演したりして、授業そつちのけで大いに稼ぐようになつたのも、この頃からである。しかし時代は大きく変化した。芸能番組に顔を出して、ふざけ半分に若者の機嫌取りをする軽薄な教授も出てきた。何とか博士と称して、正体不明のイカサマな称号を振りかざして憚らぬ教授も出てきたりした。

学者や研究者が真摯な姿勢を持つて市民社会に溶け込んでいくことは、歓迎すべきことである。大学での研究成果を、市民社会に進んで提供し、社会の啓発、啓蒙に貢献し、実践的に活躍することも、即ち、産学協同は顯著な例だが、大いに結構なこととする時代である。ただ、政治家や公務員と同様、蓄財に励むような人物に零落れない志を堅持することが大切である。

持したいところである。文芸春秋が幅広い読者層を取り込んで、高度な内容を長年維持しているが、つまりあれに沿つた写真集だ。きっと巾広く読者層に受け入れられるに違いない。

当会々員で内科医の発言によると、性に関する最近の情報過多で、若者たちの間では、頭だけが膨らんでセックレス、想像と空想に走つて満足してしまい、勃起障害で実戦不能になっている者が多いという。昔の若者は決して楽な生活をしていた訳ではないし、勤勉であり、勤労家であった。今のような飽食に身をおき贅沢をしてたわけではない。勉学に、勤労に精を出し粗衣、粗食に過ぎず人が多かつたにもかかわらず、倫理、道徳をこころえ、良識を以つて世に臨む人が大方であった。心身ともに健在であり、しっかりととした繁殖力を持っていた。それは生活力に繋がるものであった。現代は、御承知の通りで、今述べてきたものとは隔たりを感じる世の中で、かように拠つて続発する傾向に

ある男のインポテンツ・勃起障害は、既に社会的問題である。医者が指摘するまでもなく、ひょっとすると、これも少子化の原因でもあるかもしれません。

マルサスは「人口論」で、人口の増大を危惧したが、まさか現代のような飽食と少子化は予想だにしなかつたであろう。新興国の躍進ぶりもそうだし、世界で先進国では、実際は、マルサスが予想した理論と全く逆の現象が今起きている。それは又、天才ガリレオにしろ、ニュートンにしろ、天文学者や研究者たちにしても、驚異的な経済産業の発展が、結果として上空のイオン層の破壊をもたらし、化石燃料による炭素排出が巨大な温室効果をもたらし、地球の上空を覆つて温暖化を加速し、ましてや北極、南極の氷が過剰に危機的に溶け出して地表の低地を水没させ、片や、地球の乾燥化が物凄いスピードを以つて進みつつある環境破壊など想像もしなかつただろうし、計算外だったに違い

いたのが記憶にある。ブッシュよりアグネスチヤンの方がしつかりしていて賢い。

アメリカも来年は大統領選挙の年である。すでに全米予備選挙の前哨戦は始まっている。関心は共和党より民主党である。共和党だとすると、ブッシュの後釜ということで余り変わり映えがない。民主党から出るとして誰が大統領になるかだが、その民主党では六、七人が候補に名乗りを上げているらしいが、中でも早くから知名度の高いヒラリークリントンが最有力候補として人気が高い。アメリカ初の女性大統領が誕生する可能性大である。豊かな経験を持つ、これ以上の役者は見当たらない。云わずと知れた前大統領のビル・クリントンの奥さんだが、選挙戦にても旦那さんが付きまとつて、これ以上の役者は見当たらない。云わずと知れた前大統領のビル・クリントンの奥さんだが、選挙戦にても旦那さんが付きまとつて来るようだと、やりにくいだろう。旦那さんは余り出てこないほうがよさそうだ。前大統領という既成の政治の型がイメージに重なつて、そ

の引継ぎと思われてしまい、ヒラリーの新鮮さを損ないかねない。政治家の素質の上に、女優的華やかさも加わって、是非国際政治の檜舞台に立たせたいものである。油の利権が絡んで、戦争好きの荒くれブッシュの世界觀から脱却するのが第一である。クリントン前大統領の幻影を引きずつてしまふと、旧態のアメリカが変わると意味合いが相殺されてしまうだろう。

一方、そこで興味を惹くのは、無名の若きオバマである。ゴルフの選手のタイガーウッズに似ていてスマートである。若干四十五歳、弁護士を経て二〇〇四年に上院議員になつて政治暦は未だ浅いが、次第に頭角を現してきている。オバマは黒人出身と名指しされているが、実際はアフリカ系黒人で、混血である。今のアメリカで、政治家の経歴が物言うときではない。無いほうが過去の暗黒的、汚泥的利権のしがらみがなくて、過去からの脱却と、現在、未来に向

けた改革を求める時に、若い行動と、前進に新鮮さが強調されることにもなる。初の黒人候補として高揚する人気は侮れない。人をひきつけれる演説と爽やかなパホーマンス、そのスリムな身体と明るい風貌は、大統領としての素質の一つとして強力である。ヒラリーにとつては伏兵であり、強敵になるかもしれない。馬力をつけて、最後までヒラリーと熱き戦いを演じる可能性がある。

何しろ閉塞間の漂う今、アメリカ国民にとって、数ある中から、片や初の女性大統領を選ぶか、はたまた、初の黒人大統領を選ぶか、その方向に収斂されていくと、世論は歴史上かつてなく沸き立つだろう。面白い流れになつて、注目度は大である。アメリカ国民は賢明で、勇氣ある決断を迫られるだろう。今のアメリカ国民にとつても責任は重大であり、この選挙は、世界の将来を見据えた画期的な意義を持つ上で、時代的象徴である。今のアメリカは、改革

の連呼と行動力こそ、勝利への武器であるからだ。油の利権に狂奔し、各国とも資源獲得にしきを削つてゐるときだ。利害対立がこれほど激しいときはない。戦争好きなブッシュにアメリカばかりでなく、世界が辟易している。マルクスも、ケインズも、トインビーも将来の経済社会の趨勢を睨んで、あの世から「地球は青い」とうつとりしてゐるわけにも行かぬだろう。長丁場の予備選と、民主、共和両党が推す大統領選挙の成り行きをじつと見てゐるに違いないと。

よ、專制独裁政治がもたらす悲惨な社会は、今までの歴史が示すところである。

しかし世の中の態様はそんな単純なものではなくなつてきた。今考えることは、その暴力革命の担い手の時は、資本主義が熟成し、地球の全てのエネルギーを使い果たしたときである。その暴力は地球規模であり、地球の自然環境の破壊の暴力によつてもたらされる必然性からである。地球の環境破壊であり、人類の生存が不可能となる事態である。その必然性とは、やはり資本主義の発展の最終段階で惹起されるものである。資本主義の成熟した結果、惹起されるものとするところは、マルクスの理論と一致している。まさしくその通りである。しかし標榜する共産主義もない、あるいは生物の生存不可能な、暗黒の世界である。その悪魔の革命の担い手は、皮肉にも愚かな全人類である。これがマルクスに代つて主張する立場である。マルクスは未來の状況を見通して、自分の理

論をそこまで飛躍できなかつたことは、残念である。共産主義を標榜する中国が大きく変貌した。必然的に軌道修正された結果である。こそマルクスが言うところの、アウフ・ヘーベンである。変身した中国の、今大資本主義国に成長した現実を見れば歴然としている。ロシア然りである。この国々が皮肉にも、経済発展をほいままにして、単に経済格差の問題どころではない、産業汚染に国内が悲鳴を上げて、の打ち回つてている。ロシアも然りである。ましてや中国はここで、オリンピックに向けて走り出している大機関車をとめるわけにもいかない。矛盾噴出の状況である。しかしこの自己矛盾の克服は、資本家と労働者の対立闘争の構図からではなく、両者の成熟した関係で、協調と共生の意識から生まれてくるものである。堀江教授の提唱する「平和で自由な一つの世界」の建設である。そのことによつて、又地球環境の破壊と危機から人類を救うことが出来る。その

ここにマルクスの唯物史観と弁証法論的思考が役立つてくる。下部構造が、上部構造を決定する瞬間である。はだか隋筆だつたら、佐藤弘は論理をこのように面白く展開するだろう。しかし、この程度の刺激では、世間が付いてこない。世がダイナミックに荒れているからである。

時代の変化かもしれない。早稲田大学名誉教授の大内義一先生が、過日の手紙に慨嘆して書いていたように、「母校には昔の姿は失せ、学者、研究の徒がいなくなつたようです。」と、まさに信頼に足る学者、勉学に励む学生はいなくなつたような気がすると、私もそう思う。第一、物をかけない学者が身边に多い。それらしき大人物もいなく、小粒の曲学阿世の金儲け主義ばかりが徘徊する世の中である。教授も落ち目だし、学生の学力低下に至つては著しい。歐米諸国はもとより中国、韓国、インドなどと比べたら、日本の教育、学生の学力レベルはかなり低下しているのではないか。現状は慨嘆に等

ことを資本主義の先鞭をつけたメッカ、そうち今、明子が平常心で、しかも懸命になつて努力して活躍しているニューヨークから、摩天楼から、ウォール・ストリートから強く発信してもらいたい。

・・・・・（八）・・・・・

世は画一的大量生産の時代である。英国でジエームス・ワットの蒸気機関の発明で産業革命が起こり、アメリカ合衆国で最も花開いて現在がある。小松教授の英國産業革命史は名著で、我々の教科書であつたが、小説を読むより面白く、叙述は大河を思わしめるように勇壮である。しかし日進月歩の今生の世界で、仰ぐようゆつたりした学者がいなくなつてしまつた。科学と技術の進歩は人間生活の変化をもたらし、それは社会の変化をもたらし、社会の変化は即、環境の変化につながり、それは物理的変化を地上にもたらす。生活環境の変化は、人間の思考と価値観の変容を促す。まことに憮しいが、こ

しく、これでは日本の将来が危ぶまれてならぬ。大学は名前を喧伝し、箱物造りに狂奔して内容は空っぽとなりつゝある。例えば母校の、天井の高いドーム式の莊重な図書館の建物は、いとも簡単に無神經に壊されて、あとに効率重視の箱物が建つてしまつた。経済学者であり、神学者であり、牧師であり、教育者である酒枝先生がおられたら何と申されることだろう。学者、教育者、医者は一面において聖職的な仕事である。物欲の支配から遠ざかつた人でなければならぬ。対照的に二人の政治家がいた。首相在任中、所得倍増計画を振つた自民党的池田勇人、片や社会黨の委員長をした浅沼稲次郎がいた。クリスチヤンの片山哲や、川上丈太郎などもいたが、浅沼は貧乏な家庭から苦勞して政治家になつた人で、日常生活は質素であり、江戸川区あたりのオンボロの安アパートに住んで国会に通つていた。明るく大らかで、人格的に好きなタイプであった。左右社会党を統一

させた立役者である。労組偏重でもなく庶民的であり、貧者の味方について正論を吐き、野党党首としては優れた素質を持つた政治家であった。大きな身体の人で立ち向かう演説にも迫力があった。立会演説中に暴漢に刺殺されたが、清貧に甘んじて潔白な政治家であった。人の上に立つ人は、主義、思想を超えて欲にとらわれてはならない。政治家然りである。卒業式に東大の総長が、「肥えた豚になるより、やせたソクラテスになれ」と述べたが、至言である。人の上に立つ人は、眞の学者とか、教育者とか、医者とか、牧師とか、禅僧とか、そういう人との理念と精神構造を持つたものでなければならぬ。

今も尚、私は神を説く色々な牧師の説教を聞く幸いにあるが、悲しいかな、話と人柄に程遠いものがうようよしている。腐った聖職者ほど始末におえないものがある。若い人に影響するところも大きい。世界と視野が狭いし、まして

や世間での苦労がないし、常識、良識にいたつては更なるものがある。素質としても問題がある。教材として、実際の生活状況の提供を受け検証したいくらいである。無教会主義のクリスチヤン、酒枝先生の思想がしみじみと理解されるのである。まるで宇宙を仰いで、神の存在を見る姿である。

通勤途上の毎日の往来の中、私は地下鉄日比谷線で銀座駅で下りたあと、丁度銀座四丁目交差点から中央通りを通つてくるか、若しくは数寄屋橋交差点から外堀通りを八重洲に向かつてくるが、いずれにしても五百五十メートルの距離である。この通りには昔から新旧混在して有名なビルが立ち並んでいるが、最近は中央通りにあるティファニーのあるビルと敷地が売買されて、土地が坪当たり一億八千万円の計算でゴールドマンサックスが買つたというからすさまじいものである。

平成一、二年のバブル絶頂期でもそんな値段

は出なかつた。今は当時の二倍の値段であるからおそろしい限りである。しかし振り返つてみると、バブルの時は、三菱地所がニューヨークのロックフェラーセンタービルを買つたのもこの時期だつたし、更には皇居を卖つたとして、その金でアメリカのカリフォルニア州が買えると云つたり、東京二十三区を持つて、アメリカ合衆国が買えるといった風聞さえ流れた次第のときだつた。如何に気違ひじみていたことかが分かる。この狂気が、当時のアメリカにとつて日本脅威論となつて、当時のニューヨークを震撼させた。真珠湾の奇襲攻撃を受けたような感じを持つたに違いない。あの事件も狂気だつたからである。狂気が走り出してとめどなく暴走して行つたら、結末は破滅しかない。

今の都心のこの驚くべき高騰は、現象的には全く異質のものである。何処まで行くかは別である。ごく一部の日本人を除いては、全く参加していない。都心の地価の上昇は、いずれは地

方にも波及していくかもしだれないが、選別が厳しく、これは賢いことであり、当然なことである。ここ数年の都心の地価高騰は、外資やブランドが目算を持つて巧みに買い占めていく結果であり、油で稼いだ産油国の政府系資金が入つてきている要素が多分にある。しかも目利きが鋭く、傾向は一時的なものではなく、将来的、傾向的、継続的なものと考えていいのではないかと思う。東京は狭い。如何様にも操れるし、改修も出来よう。

そうした影響もあって、この二つの大通りにはさまれた地区には最近七つ、八つと大型商業施設のビルが竣工して物凄い景氣で沸きかえつている。おかげで汚かつた有楽町駅前も綺麗な大型の商業ビルが完成する。戦後六十二年たつても、有楽町駅南口のドサクサしたバラック街は汚くて品がなかつた。ここにきてようやく整備され、綺麗なファッショナブルな街に変容する。昔、フランク永井が歌つていた歌、有楽

町で逢いましょうも口ずさみたくなる。菊田一夫の「君の名は」のドラマは当時一世を風靡したラジオ・ドラマだった。その場面に出てくるのは、川があればこそかの数奇屋橋があつて、橋の上で約束をめぐつて、岸恵子と佐田啓二の恋が作られたのである。ドラマの当時は、東京に沢山の川が流れていだが、それらの川は馬鹿な都知事と都議と役人たちによつて無残に埋められてしまつたし、沢山走つていた路面電車もことごとく廃軌されていつてしまつた。残念である。それにしても岸恵子という女優は、いつまでも若くて綺麗である。知性があつて品を備えた美しさである。子供がないのに、母性的な、マリアのような存在感すら窺える。

江戸の何たるかも知らず、田舎も山奥から東京に出てきて大学をでた若造が、東京も知らずに東京都の小童役人に就職した結果、戦後の東京の街に出鱈目に手をつけて杜撰、勝手にした

仕事に過ぎない。郷土とは何か、歴史とは、江戸とは、風致とは、文化といった深い問題意識も研究課題ももたぬ山猿、田舎侍に、大東京都の街つくりを任せたがためである。都市計画の展望を持たない似非役人に全てはぶち壊されてしまつたのである。その結果が東京砂漠の歌がはやつたように、日本の玄関口である東京は、殺伐として情緒のない潤いを感じない汚い町並みに成り下がつて行つてしまつた。古い、由緒ある町名も消されてしまい、全て数字で表示されてしまった。

我がふるさと浅草猿若町は、聖天町と馬道に挟まれた小さな町であるが、江戸時代から芝居小屋のあつた街であり、中村座、守田座、市村座の猿若三座、江戸歌舞伎の発祥の地である。それが所在の印では浅草六丁目となつて、これでは何がなんだかさっぱり分からぬ。丁目を頼つていたら、何時に経つても目的地が分からず、迷子になつてしまふだろう。街には古くか

にはいかないものである。

最近に至つて都心の街並みの再開発が専ら外資指導で大変貌を遂げてきて、それはそれなりにエキゾチックに受け入れられるものでもある。外国を旅行すると、古い都や、街並みが大切に保存されて、歴史と人の息づかいがしつとりと感じられてくる。時代を生きた歴史と、思いと、叙情が覗えて、尋ねる人の郷愁を惹き、心を癒して限りないものがある。新旧混在となつた感じの有楽町が一新されて、最近はプラザを中心にして、銀座に若い女性が物凄く集中的に繰り出されてきているのがよく分かる。物凄い人出である。

こうした傾向は銀座だけではない。都内の六本木、南青山、表参道といったあたりも、物凄い街造りで大変貌を遂げつつある。これだけを見ていると、石油で沸くドバイと一緒である。しかしだぶつくお金で日本の土地はまだ安いであればいいのだが、ことはなかなか思うよう

と、彼らの目には映つてゐるようである。今東京の優良地域は、以つて不景氣知らずである。

こうした傾向は徐々に地方にも移つていくだらう。国内のお金で活気すくというよりは、外國の特殊な投資資金が活躍していいるといつたほうがいい。仙台の中心地のビル街は外資やファンダが早くから目をつけてゐる。大体北海道の山奥など目もくれない場所が、今不動産活況に沸いてゐるという信じられない話がある。スキーフィールドの二セコだ。雪質のよいスキーフィールドというだけでオーストラリアの国人達がわんざと押しかけていて定住し、観光地として沸き返つて、土地の値段が何倍となつて値上がりしてゐるそうだ。冬は別としても、カンガルーが飛び跳ねている不毛の地に比べたら、春、夏、秋の大地の燃え盛りは、魅力的だろう。日本ほど天然の美に恵まれた国はない。水が格別に旨いし、綺麗であり、清冽な点では他国にその例を見

てきているが、土地の資産はがた落ちである。外國はこんな極端ではない。日本人自身の確たる価値判断と、それをサポートする政策が必要である。今は外人と外國の金が、彼らの価値觀と物差しで土地を買つてゐるのである。日本人にそうしたもののが何處まで浸透していくかであるが、その結果、集中的に一部の土地が上がつてゐるのである。昔と世の中が変わつてきているのである。若い人たちは敏感に感じてゐるから、順應は早いが、旧態然とした年配者はとてもじやないが思考の転換を図りえず、付いていけないで居る。これは一面に国の土地に対する政策指導が誤つてゐる結果でもある。

ただ最近はご承知のように色々な沢山の金融商品が出てきて實に複雑である。一つの金融商品が色々に分散されて量的に拡大されていくから、そういう点ではひとたび胴元がおかしくなると、分散していたところが全て怪しくなる。戦時中の首都空爆に盛んに使われた親子

見ないであろう。ニューヨークへの旅にしても、そうした認識を深める良い機会である。

そこで、昔のバブルと現在のこうした土地の高騰とは、本質的に異質のものである。経済がグローバル化されたことを如実に示すものである。最早、この時代を後ずさりすることは出来ない。大都市でも外資系が都心の超優良の不動産を買つてゐるのであって、これが不動産の平均的価格を押し上げてゐるのである。

それに反比例するように地方経済は嘆かわしき限りである。地方の不要な土地は益々下落するだろうし、地方であつてもよい場所の価格は堅調に推移するだろう。中央にしろ地方にしろ、その峻別は厳しく、どうでもいいところはいくら金をつぎ込んでも息を吹き返すことは無い。酷な言い方かもしれないが、これが眞実であり、世の中であり、世界であり、実体なのである。日本の国力はそれだけ落ちてきている。国資産の構成を見ても、金融資産は多くなつ

爆弾みたいなもので、爆発したら始末に負えなくなる。これが将来予見されるバブルの可能性がある。新しい傾向の金融商品の乱発である。証券化されたものだから目に見えない。そんなところに、土地や株式以外に投資先を失つた資金が、相当買いこんで運用しているから、一旦崩れだしたら手に負えなくなるだろう。これもグローバル化で世界的な規模に膨らんでいるだろう。高齢者の預貯金がこうした波に乗つて、老後に備えようとしているからだ。その代わりリスクも多いだろう。

国会議員の中にも高齢者、年配者がいるが、中曾根元首相を除いて皆落伍者である。中曾根元首相の鋭い神經は若く、柔軟性に溢れている。先般元首相から、「日本の總理學」なる著書を贈呈されたが、^{カウ}自身は自らお書きになつた梶博士の鋭い眼光に溢れている。以つて範となすべきである。年ばかり熟練した連中には、世界の動きと流れを理解できないで居るから、

従来の思考と生き方にこだわっているので先に進めないで居る。国会がそうだから国の政策は何をかいわんやである。変なところにこだわり、古臭い伝統とか、誤った歴史と、浅薄な教養とかが変に足かせになっている。同じ頃、私は加藤寛先生から、「福澤諭吉の精神」なる著書を頂いた。熟読すると、現在の混沌として指導なき、指針なき時代と重ね合わせて、教訓大なるものがある。この著書は現在絶版であるが、先生のお手元から特別に頂いて大切な若い人に贈っている。お一人とも政治の世界と、経済学の世界の頂点に立つ人だけに、思いをこめた貴重な贈り物を頂き光榮に思つてゐる。

思うに、いま日本は、国行く末に確信と希望を見据えた若い新興国にどんどんと遅れをとつていて、日本のこの先が危ぶまれてならな難しく考えずに単純に考えて、柔軟性を發揮すべきだ。鉱物でも、金は鉛とは違うという単純なことに気がつかないといけないという

スピードで変革を遂げている。六月十一日・記

ニューヨークの旅…（九）………

インターネットの時代なればこそ、この傾向は益々激しく続していくに違いない。国が公共投資といって地方に金をばら撒いても、それによつて地方が経済的に活性化するとは思えない。経済学で云う、投資の乗數理論と加速度原理が働かないのである。金を使つても、その波及効果が働かないのである。詰まり機能しないのであるから、地方と都市の落差は益々拡大していく。人間に選択する自由があり、競争原理が許され、そして経済行為を行おうとする欲望を持つ限りにおいて、落差、格差の現象は果てなく続いくにちがいない。水は高きより低きに流れ、温度は高きに従い上昇し、金は人の集まるところに集中する。これは、自然の道

ことを言われたことがある。あれこれと屁理屈ばかり述べ立てて自己本位にものを考えていたら、だれからも相手にされなくなるだろう。今日本の日本は幕末時代の鎖国状況と余り変わつていないと、閉鎖的で排他的風潮が、あらゆる分野で残留している。政治家は派閥に固執し旧勢の維持拡大をもくろんでいるし、官僚は既得権にしがみつき、未だに目覚めずに悪さをたくらんでいるものが多い。民間に構造改革を押し付けながら、自らは改革改善を試みず、自らの財政縮小に真剣に取り組むこともない。税金の使いすぎである政府と、官僚機構の改革縮小は未だしの感である。全てにおいて、金と鉛の違いは歴然とするも、峻別し得ないで居るのは、自分本位にものを考えているからに他ならない。真理は単純にして平凡である、といわれた堀江忠男名譽教授の言である。正しこの言たるや、今の日本にとつて大切なのは、これを正直に見つめて実行するだけである。世界は物凄い

ことを言われたことがある。あれこれと屁理屈ばかり述べ立てて自己本位にものを考えていたら、だれからも相手にされなくなるだろう。今日本の日本は幕末時代の鎖国状況と余り変わつていないと、閉鎖的で排他的風潮が、あらゆる分野で残留している。政治家は派閥に固執し旧勢の維持拡大をもくろんでいるし、官僚は既得権にしがみつき、未だに目覚めずに悪さをたくらんでいるものが多い。民間に構造改革を押し付けながら、自らは改革改善を試みず、自らの財政縮小に真剣に取り組むこともない。税金の使いすぎである政府と、官僚機構の改革縮小は未だしの感である。全てにおいて、金と鉛の違いは歴然とするも、峻別し得ないで居るのは、自分本位にものを考えているからに他ならない。真理は単純にして平凡である、といわれた堀江忠男名譽教授の言である。正しこの言たるや、今の日本にとつて大切なのは、これを正直に見つめて実行するだけである。世界は物凄い

取り仕切る財務省はてんやわんやとなる。

この有様では、欧米諸国や、東南アジアや、ブリックスや、アフリカだつて、ケニアだつて、モンゴルだつて逃げ出してしまってだろう。いるのはモンゴルの朝青龍や白鳳だけである。彼らは、大日本相撲協会に居残つて土俵の上で稼いでいるが、所詮は、金を持つて入つてはこない。稼いで持ち出していくだけである。その分日本の国技の権威と人気は落ちるばかりである。空に舞う座布団は、やけっぱちのふくされの怒りであることに、ぼんやりした協会理事長の北の湖なんかに判るはずもない。朝青龍は逃げ出したが、無理やり連れ戻された。協会のこだわった面通だけである。それどころか、部屋で起きた力士の暴行事件である。力士の階級、上下の差別は極端だ。巡業、修行、訓練と、その間の力のぶつかり合いに就いては、暴行との差がハッキリしない。暴行、リンチなどが密室で許されて暗い世界である。白昼公然と行われている

る可能性がある。これが国技と称してはばかりない遅れている日本の姿である。横綱はモンゴルにとられるし、日本国籍の力士は体たらくのすえ暴行事件を起こす有様である。日常茶飯事に起きている部屋の暴力沙汰は、日本相撲協会の体質である。もはや国技の資格がなくなつた以上、補助金、税制優遇措置をはずして開放したほうがいい。封建制を残している部屋制度、茶屋制度を残し、年寄に思うようにさせている。日本は、世界の滔々とした新しき奔流に気付かずにはいる。だから全ては日本の旧態然とした慣わしに愛想を尽かし、世界から金など入つても来ぬし、入つてきた金はすぐに行つてしまふが落ちである。役所のきつい規制は、国民の自由な創意と努力を妨げている。役人天国は未だまかり通つてはばからない。

日本が独自で単独に世渡りが出来る時代ならいざ知らず、民主主義と、自由主義が確約された世界にあって、これだけ開放された国際社

気付かずいたら、遅れをとつた日本は、今頃はあの忌まわしい不良債権問題も片が付かず世界経済の奔流に飲み込まれて、とりわけ快進撃を続ける中国、韓国、インドには先を越され、その経済的属国に成り下がつていていることであつたろう。「無駄な十年」がそのまま直撃して國民は、その時、それこそ身をもつて屈辱に耐え悲痛に感じていることだろう。胸をなでおろす気持ちである。

ただ残念ながら靖国神社で意地を張りすぎた。子供みたいな幼稚性があつた。その点に気付いていた安倍さんは独自性を發揮して素早く中国、韓国との関係修復に乗り出したことは、大きな外交上の得点である。油のことも念頭にあつてか、中近東にも足を運んだ。頭の回転が速いし、行動の敏速さはこれからが楽しみである。確たる信念も必要だが相手あつての外交であり、昔と違つてスピード感のある変化の波である。これでどうやら日中、日韓にわだかまつ

ていた相互不信は払拭されて、もうこれ以上いやな思いをしなくて済むような気がする。ただ拉致問題で阿部さんが、旧態然とした姿勢をとつたりすると、足を掬われたりするだろう。信念堅持、初志貫徹は結構だが、大人になりきれないど、これも困る。そもそも育ちが違うから、阿部さんには小泉さんのようなしたたかさがないから、見せようとして変なところで役を演じて損をするかもしれない。息抜きと逃げ道も心得て、当為即妙、臨機応変のダイナミック性が必要である。即ち云いにくい雰囲気だが、本欄で度々指摘したとおり、北朝鮮との関係は、もつとダイナミックに取り組むべきだ。むしろ早くから日本独自の外交を展開して、他国に先駆けて北朝鮮を取り込むような形を持つべきなのに、いたずらに敵方に回してしまう愚かなものだった。拉致問題もはしやぎすぎで空回りばかりしてきた。直ぐ隣の北朝鮮との友好関係を、何故拡大していかないのか。脅威論を逆手

に、融和、友好策を取るほうが、気分的にもいいし、有効だし、コスト的にもいいはずである。拉致被害家族の情報も正確に取れてくる。

又興味を惹くのは、北朝鮮には膨大な鉱物資源が、今手付かずのまま眠つてることである。国際間でも油だけではなく、資源争奪戦がこれから益々激しさを増すだろう。そうしたときの北朝鮮は、やりようによつては、世界経済の檜舞台に資源大国として躍り出てくる可能性は大きい。阿部さんは、北朝鮮にとつて執拗な拉致問題でイメージを悪くしているが、ここは逆に打つて出てみることも得策である。機を見るに敏で、相手の対応が違つてくるはずである。北朝鮮は、これから自国の発展について日本の資金と技術と人材を必要としている。ロシア、中国に対して心から許していないはずである。状況と力関係で、擦り寄つてゐるに過ぎない。

経済的には日本は、我々国民は、危ないところで溺死するところであった。喉もと過ぎれば

ないが、日本の経済と社会全体を悪くしている。農村の休耕田ばかりではない、國も、自治体も、補助金と云う名の下に、國民の税金を湯水の如く使つてゐる実態を、最近私も身近に見聞し経験して嘸然たる思いをしたのである。周知のことであるが、作らなくていい「新銀行東京」は東京都が民間の反対を押しきつて鳴り入りで作ったものだが、何年たつても赤字経営で早くも八百億近い累損を出し、先行き暗く経営破たんの憂き目に会つてゐる。恐らくこの補填も税金である。行員が額に汗して働いて、埋めしていくものではない。埋めていく気持ちはさらさない。ぬらりくらりで怠け過ごし、挙句に都民に責任を負わせるに決まつてゐる。私は東京都民の一人として都税を払つてゐる。こんな尻拭いをさせられてはたまらない。

例えば都には「特定優良賃貸住宅制度」なるものがあつて、これに推定だが毎年約六十億円近い補助金を払つてゐる。個人が所有する土地

で、日本人はこのことに余り気付いていない。今だつて国力を示す株式市場の様相は、外國の活況に太刀打ちできないで、全くの蚊帳の外である。土地にしてもしかり、少子化に向かう日本の土地政策を抜本的に改めなければならぬ。人口の集約化を図つて住宅地、工業用地、商業地、耕作地、山林・緑地と機能的に仕訳して乱開発を防ぎ、國土の環境の保全を図らねばならない。日本はこれを余りにも野放図にしてきた。土地の付加価値を高めていくことは国益に叶うもので、いたずらに忌避するものではない。農地にしても、放置したままの状態の地方はわんさとある。休耕田を奨励するのに無駄な補助金を出して國民の税金をつかつてゐる。税金を出して、農民に怠惰を強いてゐる。農業の近代化を進めるに、法人企業の農業經營の参入を以つて収益を上げていくこと、穀物の自給率を高めていくことが戦略的に重要である。休耕田を放置するための補助金制度は一例に過ぎ

にマンションを建てるときに既に補助金を出しているが、また出来上がつたマンションの入居者に家賃の三分の一をただで支給してゐる。都にはこの種のマンションが沢山あつて、運用についても中身を吟味すると、かなりの部分が無駄に使われてゐる。住宅不足の時代ならいざ知れず、この先も民間による住宅の供給は潤沢である。これらのマンションの入居者は、それ相当の所得を得てゐる人たちで、補助金を得なければならぬような人たちではない。この補助制度の運用も役人の手に任せているが、制度そのものを見直すべきである。

驚くべき実態は、原則として二十年間転売禁止になつてゐるにもかかわらず、これらのマンションが途中で売却される事態だつてある。計画は公的資金を使って、民間住宅を円滑に供給していくもので、利益追求のものではない。しかし、規則に反した不当な売買によつては、あからさまに利益追求の目的に悪用されること

だつて想定される。例えば相続が発生したり、破産したり、倒産したりして維持できなくなれば、二十年以内でも売却してくる。その場合、新たに取得した所有者は、残りの何年かを誠実に継続して所有していけばまだしも、法の網をくぐつて、利益目的に売却しないという保証はない。事前にチェックするはすだが、完全に阻止することは出来ないだろう。公共的要素の強い物件である。こうした物件が、マーケットに出されて自由に頻繁に売買されていく性質のものではない。縦しまばこうした目的に自由に売買されていくのであれば、この際補助金の支給を停止する措置を取るべきであろう。買受け人は、支給を辞退すべきである。そうでないとすれば、一民間人、若しくは一民間企業による税金の収奪を行つていると云うべきであろう。

ところが近時、現実に、あからさまにリートに売却され、信託財産として後に転々として特殊企業の利益追求の対象になつていいく可能性

を負担しているから、税金の無駄使いは、納稅者の気持として到底納得できるものではない。

しかも都民の税金が食いものにされる確実な可能性を、現在進行中を、都は知つて知らぬ振りをしている。これは大問題である。善意で忠告し指摘しても、逆につぶしにかかる。恐らく石原都知事は蚊帳の外で、知らされていないはずだ。四人もいる副知事も然りである。知事がこれを知つたら、激怒するだろう。こうしたことは冰山の一角である。想像力豊かで元気な作家が都政に参戦して、改革改善に奮闘していると思つているのだが、効果なく、規制と既得権にしがみつく官僚の牙城は固い。

取り敢えずの提案だが、こうした補助金の制度の廃止を含めた見直しを直ちに図るべきである。当面、破産、倒産、相続の発生を確認してから、制度の趣旨を厳守する売却先を適正に選別し、入札でこれを決定する。これをもつて税金が利益追求のために悪用されないように、

が現実となつて出てきた。當利追求の企業に売却されたあとでも、その企業のために、都民の税金である補助金は、嘗々として企業に支給され続けられるのである。補助金は、即ち都民の税金は、形を変えて企業の利益の中に組み込まれていく。まさに白昼公然となされる、税金収奪の構造である。この種のマンションは、東京都だけでも六二九棟もある。しかも補償期限は二十年間だから、都にとって、とりわけ都民にとつてざつと一一〇億円以上の税金が使われていることになる。一部は、利益を目的とした売買によって、この先とも食い物にされてしまうだろう。これに対する補助金は、入居者への補助金だけでなく、管理費、建設費、借入利息に対しても行われているから、大変な額になる。食い物にされていく都民の税金が、一部だろうが何だろうが、あつてはならないことである。長い目で見ると、この種の制度は必要でなくなつてきている。都ばかりでなく国も絡んで税金

行政指導すべきである。これは一時的措置であつて、目的は、あくまで必要のない補助金制度の廃止である。

この種の補助金の全廃を図り、この分野での改革、改善を図らなければ、都税はいつでも一部のよこしまな群れに奪われていてるのである。東京都だけでなく、この種の制度は、各府県にもわんさとあるから、なんとも言いようがない醜態である。日本の近代化は少しも進まないことになる。国民も為政者も一丸となつて、この悪弊の補助金と、規制の悪弊から脱却することである。そして企業の自由競争によつて、自らの生産性を高めていくことが重要だ。これによる地方の活性化、効率化と、所得の向上につなげる工夫である。旧態然の日本が、この国際的な出遅れとなつて、否、魅力のなさを惹起せしめている面がある。あるのである。

こうした問題は次期東証の交替劇にも反映されてきている。外国資本にとって魅力を感じ

ない日本の市場から資金を引き上げ、元気のいい国々に向かって資金を移している。複雑な規制を撤廃し、自由で公正な取引きを以つてグローバル化に合わせていかないと、日本は世界から取り残されてしまうということだ。旧態然の法律で、ブランドックの件も時代に逆行する判決で、世界から驅逐を貰つた。これでは日本に金を投資する人はいなくなってしまう。中国、韓国、ベトナム、インドなどの至近の例を見ても歴然である。いくらグローバル化とはいえ情けない話で、東京市場はニューヨーク、香港、上海などの株式の動向を見ながら動いている始末で、独自性は全くなくなってしまつてゐる。独自性も何もあつたものじやない。諸外国のマーケットが元気なのに日本のマーケットは世界一だろう。企業業績の回復が立派なのに少しも反映されていない。国の政策と市場機能は円滑に發揮されていない証拠である。全てが

講演会の主たる講師（講演時役職）（敬称略）

間違っているからである。株式市場を取り巻く
夥しい規制は、そのままの状態が多い。例えば、
銀行にしても業務に係る規制は、企業の活動を
阻んできている。国際社会に伍して競争に勝ち
抜いていくためには、こうした規制を撤廃しな
くてはならない。日本は資源を持たぬ国である、
世界は激烈な経済競争の渦中にあり、日本が唯
一頼れるものは人材と技術、過去に蓄積してき
た資本のみである。続く〇七年七月十日 記